

---

# 狼と羊

如月 明

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狼と羊

### 【Nコード】

N9821X

### 【作者名】

如月 明

### 【あらすじ】

少女を拾ったその時から男の人生の歯車は変動する…ようなしな  
いような…

わかる人にはわかってしまう、言わば《牛肉といいつつ豚肉が八割を占めるエセ牛肉》のような、お話です。

つまり、なんらかのパロディが多く、変な所にオリジナル要素が含まれているということですね。

どうか生暖かい目で見下されるようお願いいたします。

スーパーの特売って天気悪い日によくやる(前書き)

サブタイについて作者の一言

俺？俺は天気良くても行かねーけど。

スーパーの特売って天気悪い日によくやる

えー・・・何か長編に挑戦したくなりました。  
きつとすぐ更新停滞すると思いますけど。

当初は女主でいこうと思ったんですけど、やっぱり男主がいいんじゃない？（知らねーよw）ってカンジになって、まあ・・・どっちも取つたるわアア！！的な…ハイ。

舞台は江戸、歌舞伎町の入り組んだ道を進んだ一角にある診療所に、その男はいた。

容姿端麗で頭脳明晰のその男は、今まで『人を愛した』ことがなかった。

生まれた時から孤独。  
育ての親がいたかどうかさえも定かではない。

その孤独を打ち消すかのように、  
齢15という若年で血が血を洗う  
戦場に身を投じた。

それから、自分に医術があることに気づき、戦場を去った後診療所を開き、格安で診療を続けてきた。

そんな男が出会った、一人の少女。

これは、一人の男が真の喜び、分かち合うとはどんなことが、

愛とは何か？

知る物語である

… ちょっと大きく出過ぎましたかね。

とりあえず設定です

名前

篠狼 梗

(ササラ コウ)

年齢

23歳。

身長・体重

176cm、63?

容姿

大体前述通り。

髪は藍色で肩につく位の長さ。癖っ毛。  
紫色の目。肌は少し青白い。

性格

S。てか狂ってるカモ。

趣味

読書、死体解剖。

近所のかかりつけ医でもある。ちなみに週に一回、真撰組に往診に行く。

真撰組の臨時医療班長。

前述の『戦場』とは攘夷戦争のこと。

しかし常に単独行動だった為銀さん達とは戦後、初めて会った。戦時はその強さと正確な狙い故に「鋭狼<sup>エイロウ</sup>」と呼ばれた。

他にも、出張診察などが仕事。

次は女の子の方です

名前

羊里 ほまれ

(ヒザト ホマレ)

年齢

16歳。

身長・体重

154cm、39kg

容姿

腰までの黒髪。

目は薄い紅色。

めっさプリティー！。

スタイルは抜群。

健康的かつ魅力的な白肌。

性格

明るい。ちょっと鈍い。

趣味

料理。梗の趣味である死体解剖は知ってはいるが、手伝ったり見たりはしない。

実は、母親が《奇形人レンタルオークション》という所で働いていたので、ほまれもそこで文字通り「奇形人」として働かされるはずだったのだが、ほまれは普通の人間の容姿で生まれてしまった。

が、可愛らしい容姿からやはり、オークションに出されることに。母親は、我が子をこれ以上苦しめませんがため、自らが囿となり、ほまれを逃がした。

ほまれの説明が長つたらしくなりました。

お話は、ほまれが逃げてるトコから始まります。

ほ「はあっ…はあっ…」

どれくらい…離れた、かな？

激しい雨音以外何も聞こえない。

とにかく逃げなくちゃ…

ほ「うっ…げほっ…」

『ビチャッ』

ほまれは力尽き、ある長屋の前で倒れた。

『ザー……ガラッ』

長屋の戸が開いた。

？「……フウ…」

ほまれを見つけたその男は溜め息をつき、ほまれを抱え長屋へ入った。

ほ「……ん……」

ほまれが目を覚ますと、全く知らない部屋……というか書斎にいた。

ほ「……どこどこ?!」

……まさか、捕ま……

?「ようやく起きたか。」

ほ「きやあつ?!」

?「起きるなり恩人を化け物扱いか。」

ほ「まさか……貴方が私を?」

?「そうだ。」

ほ「あ、ありがとございます！」

？「で、単刀直入に聞く。何故あそこで倒れてた？」

ほ「…込み入った事情があつて……つて、痛つ?!」

男はほまれの腕を掴んで見せた。

？「骨折こそしてねーが、ここまで重度の打撲や切り傷、火傷もある。

余程の事情だな。」

ほ「えつと……」

？「…“裏”のモンか。」

ほ「!……はい……」

？「だが、怪我人に変わりはない。4日間は無闇に動くな。」

ほ「匿つてく」「外で野垂れ死んでたら、俺の享樂の一部になったかもな? (黒笑)」「……きよ、享樂? (怯)」「

？「お前みてーな奴なら大歓迎だが? (黒笑)  
何だ、《解剖》されたかつたのか。(ニヤリ)」「

ほ「ちつ、違います違います!許して下さいい!」

？「ハッ、面白エ奴。」

ほ「か、解剖ってことは…お医者さん？」

？「一応な。」

ほ「でも…（解剖が好きって…）（怯）（」

？「この部屋の右隣が居間だ。他は入るな。」

ほ「あの…お名前は？」

？「篠狼梗。」

ほ「梗さんですね。」

梗「お前は？」

ほ「羊里ほまれです。」

『ガラッ』

診療所の方から戸が開く音がした。

梗「ったく…少し待ってる。」

『ボタン』

梗は部屋を出た。

ほ「あたし…これからどうしよう…」

4日経ったら出てかなきゃいけないけど、この町よく分からないし…

ほ「…梗さん、どうしたんだろ？」

と、ほまれがベッドから降りようとした瞬間。

ほ「あ、あれ？」

足…動かない？…

ほ「うんっ…しょー！」

やっとの思いで足を下ろした。

『ガチャッ』

梗「お前、何やってんだ？」

ほ「足がちゃんと動かないんですけど…」

梗「そりゃあ、足の筋肉は特に麻痺してたからな。」

『グ〜…』

ほ「…！」

梗「忙しい奴だな。(笑)」

ほ「…／／」

梗「茶漬け、食うか？」

ほ「たつ食べます！いたた…」

中々ベッドから出られない。  
すると…

『スッ…』

梗「手伝ってやろうか？」

いつの間にか、ほまれの腰に梗の腕がまわされていた。

ほ「いつ、いりませんよ！／／どこに手まわしてるんですか？！  
／／／」

梗「ただ居間に連れて行くことしただけだけだぜ？  
何か期待してたか？(妖笑)」

ほ「なっ?!／／／」

梗「んじゃ、《自力》で来るんだな。(黒笑)」

梗は部屋を出て行った。

5分後 居間

『ガタン』

ほ「ゼー…ゼー…」

梗「意外に早かったな。」

ほ「すごい体力消耗したんですよ！」

梗「もつと素直になれば良かったものを…」

ほ「誰が喜んであんなことを！！／／／」

梗「ほら、茶漬け冷めるぞ。」

ほ「むう…いただきます。」

『シーン…』

静寂が2人を包む。

梗「…ほまれ…」

ほ「むぐっ！はっはい？」

梗「呼んでない。」

ほ「そ、そうですか…」

いきなり人の名前口に出したかと思えば、『呼んでない』って…  
いまいち掴めないなあ…

良い人なのか悪い人なのか、真面目なのか変態なのか…

梗「>ピクツ<変態？」

ほ「>ビクツ <…（知らないフリ知らないフリ…）」

梗「ほまれってホント分かりやすい奴だな。（笑）」

ほ「え?!（まさか変態って思ったのバレた?!）」

梗「お前も十分変態だろうが。」

ほ「梗さんと一緒にしないで下さい!…あ。」

梗「プツ…」

ほ「…勝手に人の心読むのやめてくれませんか…」

梗「そういや、俺お前と寝るから。」

ほ「はい…え？」

梗「耳悪ーのか?お前と寝るつつたんだよ。」

ほ「えええ?!」

羊を拾った狼はある意味超危険人物。

スーパーの特売って天気悪い日によくやる（後書き）

（後書き）

パクリネタじゃありませんよ。いやホントに。

ただ、医者ネタやりたかっただけです。

断じて、パクリじゃありません。（大事なことなので二回言いました。）

ジャケットについてるクソ小せーオシヤレポケットでも、たまには役に立つ(前

サブタイについて作者の一言

案外やる奴。

ジャケットについてるクソ小セーオシヤレポケットでも、たまには役に立つ

『チュンチュン…』

ほ「うん…あれ、梗さんもう起きたんだ。」

それにしても昨日は…

（昨夜 就寝時）

ほ「梗さん…私壁側はちょっと…」

梗「別にいいだろ。」

お前を逃がさない為ってのもある。」

ほ「逃げる？」

梗「仮にも、お前がまともな奴って確証はねーからな。俺の《嗜好物》になりたくなかったら動くな。」

ほ「…（怯）でも、その…トイレ…」

梗「懇願すりゃ連れてってやるよ。（黒笑）

でなけりやここで《垂れ流し》だな。」

という鬼畜発言が出て、一回も起きなかったんだよね……(というか起きられなかった)

梗「ほまれー、早く来い。」

居間から梗の声が聞こえてきた。

〈居間〉

『カラッ』

梗「もうつたい歩き出来る位回復したのか、チッ。」

ほ「今舌打ちs……」

梗「朝飯食つぞ。」

〈食後〉

ほ「梗さん。」

梗「何だ。」

ほ「私《無闇に動くな》とは言われましたけど、この後はずっとあの部屋の中ですか？」

梗「じゃないと俺の言った期間より治癒がかかる。」

ほ「何かお手伝いすること……」

梗「ない。」

ほ「……>シユン<」

そんなこんな（ テキトーw ）で4日間はあるという間だった。

梗「んじゃ。」

ほ「いや、いきなり言われても……この町のこと色々聞きたいんです

けど。」

梗「しゃあねえな。」

梗は大体のことをほまれに教えた。

ほ「へえ〜。楽しそうですね！」

そしてついに別れが…

ほ「…それじゃ…お元気で…」

梗「達者でな。」

ほまれは歩いていった。

梗「フウ…ようやく行ったな。」

梗が長屋に入ろうとした時。

？「た、大変だあ！」

近所のオヤジが走ってきた。

梗「騒々しいな。どうした？」

オ「あつちの通りで人が倒れちまったんだ！」

梗「わかった。すぐ行く。」

梗は現場へ向かった。  
すると…

？集団「おお！息を吹き返したぞ！」

その集団の中心には、ついさっきまで一緒にいた人物 ほまれがいた。

梗「医者だ。そいつを念の為診療所に連れて行く。」

？1「おう、篠狼の旦那。頼むぞ。」

（30分後）

梗は診察を終えた。

？「ありがとうございます。」

梗「礼ならそつちの奴にするんだな。」

お前に心肺蘇生を施したのはそいつだ。」

？「そうだったんですか？！本当にありがとうございます！」

ほ「いえ、そんな……」

？「また病に伏せた時は必ず来ます。では。」

『パタン』

梗「……まさか、お前とはな。」

ほ「いきなり目の前で倒れちゃって……無我夢中だったんです……」

いや、無我夢中なだけですすぐにその場で、あれだけ正確に心肺蘇生を施せるはずがねえ。

梗「……こりゃ、決まりだな。」

ほ「え？」

梗「お前今日からウチで働け。」

ほ「はい……ってえええ？！」

梗「ちょうど助手が欲しかった所だ。」

ほ「だからって…私ですか?!」

梗「ブラックジャックだってピノコが必要な時がある。」

あれ?今ちょっとキャラが崩れた気が…

梗「それに…」

梗はほまれに近づき…

梗「プライベートも、な?(妖笑)」

ほ「ぷ、ぷらいべーと?ノノノ」

梗「医者のアシストをするのが看護師だろ?(黒笑)」

あ、やっぱり梗さんは梗さんなのね…

梗「とりあえず、俺が1週間で基礎知識をみっちり叩き込んでやる。」

ほ「短つ?!」

梗「言っておくが、《優しく》教えてなんてやんねーからな。覚悟しとけよ?(妖笑)」

ほ「は、はい…(汗)」

こうして私と梗さんの奇妙な共同生活は再び始まった。

私、ちゃんと看護師になれるのかな？（汗）

狼の拾った羊は仁の志をもった少女。

ジャケットについてるクソ小せーオシャレポケットでも、たまには役に立つ（後

）後書き）

はい。

全っ然銀魂キャラ出てません

次回こそは…多分…出す予定です。

てか、色々飛んだを設定加えてしまい、

すいまつせーん！！

「お母さん、あそこに変なおじさんいるよ。」「目合わせちゃダメよ！」（前書

ほまれが仕事に大分慣れたころ、《例の》あの人がようやく登場！

「お母さん、あそこに変なおじさんいるよ。」「目合わせちゃダメよ！」

ほ「んっ…無理、ですっ…！」

梗「んなもんじゃ足りねえよ。」

端から聞くと誤解しかねないこの会話。

ほ「梗さん、持ち上げるなんて…！」

梗「それぐらいの力がなきゃ、看護師以前にこの町で生きていけな  
いぞ?」

今はスパルタ特訓4日目。カルテの書き方、薬の作用など、かなり  
大変だったけど覚えた。

梗「せめて、お前より10kg重い奴ぐらい持てるようにしとけよ。」

そう言うと、引き出しからセカンドバッグ大のケースを取り出した。

梗「さて、次は最大の難関だな。」

ほ「??？」

梗はケースから何かを取り出し、目盛りのついたガラス製のパーツに合体させ、ほまれに見せた。

ほ「ちゅ、注射?!」

梗「採血と予防注射は必須だ。」

ほ「でも、こればかりは練習が…」

ほまれがそう言うと、梗は白衣の袖と中の着物を捲り、ほまれに腕を突き出した。

梗「俺の腕で練習すりゃ良いだろ？」

ほ「だっ、だって失敗したら!…」

梗「失敗もクソもねえよ。一発で成功させろ。」

ほ「…分かりました!」

梗「まずは、俺がお前に手本として、打ってやるよ。」

ほ「>ゾクリくえ…？（汗）」

ほまれは逃げ腰になっている。

梗「目閉じんじやねえぞ。まず、採血だ。

台の上に腕を乗せる。

それから、余分なものが入らねーよう脱脂綿で腕の内側大半を消毒する。そして…」

梗の手本をほまれは真剣に見ている。

梗「それが済んだら患者の腕を指で探るんだ。

血管の感触はわずかでも確かに存在するからな。」

そして注射なんだ…

ほまれは針が向かってくるのを待った。

梗「ここからだ。

このまま刺す訳じゃない。」

ほ「え？」

梗「患部を軽くはたく。」

『ペチッペチッ』

梗「これだけで患部の痛覚がわずかに麻痺する。」

ほ「そんなことが……」

梗「で、傾きはこれぐらいな。」

ほ「はい……て、もう刺さってる?!全然分かんなかった……」

梗「……まあ、ざっとこんなモンだ。」

ほ「わあ……すごい!!」

ほまれば若干興奮気味に採血した部分をみた。

梗「んじゃ次はほm……」

『ピンポーン』

梗「……チツ、最近来なくて怪しいと思ったら……」

梗とほまれば玄関へ向かった。

ほ「梗さんのお客さんですか?」

梗「ただのカスだ。」

『ガラッ』

?「あー疲れた。今日飲みにいk……え?その娘誰?」

梗「ウチの新しい看護師だ。」

？「俺すっげータイプなんですけど！ー！てか、いくつ？場合によっ  
ては犯罪」…」

ほ「16です！！（怒）」

？「マジで？んじゃ狙っちゃおっかな？あ、俺坂田銀時っーん  
だ。」

まあ、銀さんて呼んでくれや。」

ほ「羊里ほまれです。」

よろしくお願いします。」

梗「全く…趣味が悪いなお前は。」

銀「何ですか。梗も狙ってるワケ？」

梗「優秀な人材をみすみす取られる訳にはいかないってことだ。

ああ、ちようど良い。

銀時、実験台になれ。」

銀「実験台？まさか改造人間にするってんじゃねーだろな。」

梗「なに、簡単なことだ。ほまれが今採血の練習してんだよ。  
血を少し抜くぐらいどうってことねえだろ？（黒笑）」

銀「いやいや、絶対血全部ぬ、抜くつもりだろ！！（怯）」

梗「よし。ほまれ、練習再開するぞー。」

梗は銀時を奥へ引きずっていった。

銀「俺はまだ死にたくないイイイイ!!」

（40分後）

銀「……………」

銀時はぐったりと横たわっている。

梗「ようやく終わったな。」

ほ「あの、銀さんは良いんですか?…」（汗）

梗「アイツはほっときゃ起きる。」

梗は診療所の方へ行った。

ほ「…銀さん、大丈夫ですか？」

ほまれは銀時に駆け寄った。

銀「…ああ、何とかな…」

ほ「銀さんて、梗さんとお知り合いなんですか？」

銀「まあな。」

ほ「…梗さんとはどのくらいの仲なんですか？」

銀「飲み仲間、っつていやそうなるけどよ。」

梗がもつと俺達の近いトコにいればな…」

ほ「近いトコ?…」

銀「実はな、俺昔攘夷戦争にチラツと参加してたワケよ。そんで、梗も俺達とはかなり離れたトコで参加しててな。」

ほ「じ、攘夷戦争…やっぱり…」

銀「前から感じてたっつて感じだな。」

ほ「何か普通の人とは違うものを感じたんです。……そう、《あんな人達》とは、違うんだって…」

ほまれは急に震えだした。

ほ「だから、怖い…捕まったら、また…いや、いやだ！」

銀「落ち着け！しっかりしろ！」

羊は悪夢を思い出す。

「お母さん、あそこに変なおじさんいるよ。」「目合わせちゃダメよ!」(後書

〜後書き〜

キャラ崩壊は気にしないで下さい。

銀さんが、出てくるやいなや酷い扱いになってしまい、心からお詫  
び申し上げます。ヽ(一一) ^

ガキの頃は火ついたタバコの先端握っても大丈夫だったり…するワケねーだろオ  
何かちょっとアレなアレがアレしてますので、しし承下さい。

ガキの頃は火ついたタバコの先端握っても大丈夫だったり…するワケねーだろオ  
何だ、奇形じゃないのか。まあいい。  
もう少し育てば物好きの変態オヤジが借りてくれるだろうよ。

ごめんね…ほまれ、ごめんね…

君可愛いね…さあ、こっちにおいで…

人っていうのは

自分のことしか

考えない。

自分の欲の為に

他人を利用する。

その人の苦痛なんて

お構いなし。

熱い…痛い…やめて！

モウイヤダヨ。

イキテタツテシカタガナイ。

シ  
ニ  
タ  
イ

ほ「う…」

ほまれは意識を取り戻した。

梗「ほまれ…」

銀「大丈夫か?!」

梗「少し静かにしてる。」

銀「あ、すまねえ…」

流石に目の前でほまれが倒れたということもあって、銀時はかなり心配していたようだ。

梗も若干複雑そうな顔をしている。

ほ「あ…私、倒れて…」

銀「その…ごめんな?」

ほ「別に、銀さんが悪い訳じゃ…」

梗「ほまれ、お前俺が正体聞いたとき、《裏》のモンだって言っ

だが、遊廓とか薬売りとか、生易しいトコじゃねーだろ？」

ほ「っ……………はいっ……」

ほまれは返事を返すと、梗達に背を向け着物を腰まで下ろした。

銀「ちよっ、おま……………!」

梗「…こっきたか……」

ほまれの背中には、首輪の形を模した直径15cmはありそうな焼き印があった。そして、輪の中には太い縦線が3本。

梗「聞いたことがある…完全な人の形をしていない者達を集め、見世物にしたり、金持ち達に貸したり、好き勝手やってる奴らがいるらしいな。」

ほ「はい…だから、《これ》は……………奇形人の、烙印なんです……」

銀「そいつらの方が人じゃねえだろ……」

梗「…てことは…誰かが逃亡に協力した訳だな。」

ほ「……………母さんが…囹に……」

梗「それでか…」

ほ「どうしても、思い出すんです…忘れようとしてるのに…」

ほまれは頭を再び抱え、うつむく。

梗「…忘れたい過去ってのは誰にでもある。

でもな、それは忘れちゃいけない。

でなけりや《人生》じゃねーからだ。

だから、その過去も含めつつ、更に《思い出》が必要なんだ。」

ほ「梗さん…」

梗「俺だって最初は似たようなモンだった。

過去にとらわれて、周りを何も見ちゃいなかった。でも、この町に  
来ているんな奴らと《思い出》ができたんだ。」

銀「だよなー、お前と初めて会った時は『コイツ絶対友達いねえだ  
ろっな』とか思ったしな。」

梗「それは銀時も同じだろうが。」

銀「俺なんか10年来のダチゴロゴロいるし？梗と一緒にすんなよ。」

梗「どうせ指名手配犯だらけだろ。」

銀「アイツら勘定にいれんなよ！」

ほ「…あははっ…仲良しなんですね。（微笑）」

銀・梗「何でこんな奴と。（！）」

梗「真似するな。」

銀「その言葉をそのままバットで打ち返してやるよ。」

ほ「ふふっ。」

羊は獣達と笑いあう。

ガキの頃は火ついたタバコの先端握っても大丈夫だったり…するワケねーだろオ  
（後書き）

今回はほまれの過去でした。

烙印を大げさにしすぎましたかね。

ということで次回は

『ほまれ 初 往診』

です。

では次回（＾|＾）ノ

変態じゃない！変態という名の紳士なんだ！（前書き）

サブタイについて作者の一言

俺、よく言い訳する時こう言ってるな。

変態じゃない！変態という名の紳士なんだ！

梗「……朝か……」

味噌汁の匂いが……

『ガラッ』

ほ「あ、梗さん！おはようございます！（ニコッ）」

ほまれは俺に気づくと明るく笑いかけてきた。

思わず顔がゆるm……ってなんでいきなりにやけなきやなんねーんだ……クソ作者が……

ほ「梗さん？ご飯出来ましたよ？」

梗「……んじゃ食つか。」

『カチャカチャ……』

梗「言ってなかったが、今日は往診に行くぞ。」

ほ「往診って、梗さんがいつも行ってる所なんですか？」

梗「ああ。まあ、簡単なことしかやらないけどな。週1で行ってる。」

「

ほ「じゃあ、今まですごく大変だったんじゃない？」

梗「慣れりゃ何てことねーよ。5、60人だからな。」

ほ「それを1人で?!」

梗「食い終わった所でいくぞ。」

ほ「梗さん……」

梗「何だ。早く支度しろ。」

ほ「やっぱり…《アレ》着なくちゃいけないんですか? / / /」

梗「仕方ねえだろ。」

アイツが持ってきた中では《アレ》が一番マシだったんだからな。」

この2人が言っている《アレ》とは…

（一昨日）

銀「そついや、ほまねって看護師なのにナース服とか着ないん……」

『ドガッ』

梗は銀時を蹴り飛ばした。

銀「のわっ?!」

ほ「銀さん?! 梗さん何するんですか!」

梗「どうせ変態チックな妄想の産物と糖分の塊だろうが。この天パは。」

銀「糖は認めるけど、妄想は違うから! もっと違うもので構成されてるからね?! 俺は!」

梗「別にナース服なんか着なくていいだろ。気持ち悪い。」

銀「そうかぁ? ほまれが着れば別モンに見えるんじゃないか? (ニヤニヤ)」

ほ「わ、私が?! 着る訳ないj:/」

銀「そうと決まれば、俺が自己流情報網で用意してやるよ。」

梗「ハア…無地で動きやすいのにしろよ。」

という経路があり、今に至る。

『パタン』

ほ「どうしよう…／／／」

ほまれは部屋に戻りナース服を見る。

型こそ着物調だが、スカートの丈がとても短く、体のラインがでやすい型だ。

ほ「…ムリです。着れる訳ありません。

じゃあナシ…とは行かないんだよね…恥ずかしすぎるよう…／／／」

今までこんな物を着たことがなかったので、かなり抵抗があった。

何で銀さんこんなを選んだんだろう…／／／

『コンコン』

ほ「>ビクツ<はっはいいい?！」

梗「着替え終わったか？」

ほ「まだです！」

梗「あと20秒で着替えないと、部屋に入るぞ。」

ほ「わああ！すぐ着替えますっ！／／／」

（15秒後）

『ガチャッ』

ほ「はあ、間に合った…」

梗はカーディガンを羽織り髪をポニーテールにして出てきたほまれを、まじまじと見た。

梗「…ほオ。変わるモンだな。」

ほ「え？」

梗「行くぞ。」

ほ「？」

梗「ここだ。」

ほ「…『まえらぐみ』?」

梗「《真撰組》だ。」

早い話、警察だな。」

ほ「へえ〜。」

すると屯所の門が開き中から、黒服の男が出てきた。

隊1「先生！お待ちしてました！えっと…そちらの方は？」

梗「新しい看護士だ。」

ほ「よろしくお願いします。>>コッ<<」

隊1「こっこちらこそ…(か、可愛い…／＼／＼)」

『テクテク…』

ほ「具体的には何を？」

梗「風邪が3人いる。1人が重症だ。

それと、骨折が2人。

あとは申し出てきた奴だけマッサージしてやれ。分担して作業する。俺が来た奴らの心音チェックと問診、風邪人の治療をする。

ほまれは骨折した奴の治り具合確認とリハビリ、マッサージだ。」

ほ「はい！」

〈5分後〉

うゝ、緊張するなゝ…

『ガラッ』

ほ「失礼します。」

隊2「はい…ってアレ？篠狼先生じゃない…？」

ほ「私、今度から看護師として来ることになりました、羊里ほまれ  
といます。よろしくお願いします。」

隊2・隊3「よっよろしく…（こ、こんな可愛い娘が俺達を?! /  
ノノノ）」

（20分後）

ほ「それじゃあ、お大事に。（ニコッ）」

『ガタン』

隊2「…俺、骨折治っても毎週検診受けに行こうかな…／／／／」

隊3「俺、頭に包帯巻いてもらうとき、胸がすっげー近くにあったんだ！／／あのまま触れれば…／／／」

隊2「屈んだときの脚も思わず鼻血出るかと思ったぜ…／／／」

隊3「あの顔であるスタイルは犯罪だろ／／／」

『ガタツ』

梗「終わったか。」

ほ「あと、マッサージだけです。」

梗「隣の部屋だ。15人くらいいる。それぞれ患者が所望した部分を5〜10分を目処にマッサージしろ。」

ほ「はい。」

『ガタン』

隊数人『…ポカーン／／／』

梗「…どうかしたか。」

隊4「今のつて…新しい看護師の?」

梗「そうだ。」

隊数人ヒソヒソ話「「すげー可愛くね?／／」「俺何か興奮してきた／／」「でも、今までいなかったんだぞ?」「まさか先生ともうデキて…?!」」

梗「そうか、俺がそんな奴に見えると?（黒笑）」

隊5「そっそんな、滅相もない…（怯）」

梗「次言ったら…」

梗は、白衣の内側から鋭く光るメスを取り出した。

梗「…分かるよな？（ニヤリ）」

隊数人「>ゾクツクわっ分かりましたアア！」

「ほまれ」

ほ「次の方どうぞー。」

隊8「はははいつ！／／／」

ほ「どこをマッサージすればいいですか？」

隊8「あ、足を全般的に…／／／」

ほ「それでは、ズボンを脱いでうつぶせになって下さい。」

隊8「ズ、ズボンを？！／／／」

ほ「くまなくマッサージする為なんです。

私が見ていない方が脱ぎやすいなら、言って下さい。」

隊8「じゃあちょっと目つぶって下さい…／／／」

ほ「はい。」

隊8「……それじゃ、お願いします／＼」

ほ「じゃあ、始めますね。」

『ガヤガヤ…』

?「なんでイ。随分と騒がしくなってるみてえだな。」

『ガラッ』

?「何かあつて…こついう訳かイ。」

隊9「ありが…おつ沖田隊長?!」

隊全「えっ?!」

沖「んな驚くこたあねーだろイ。見られるとまずいことでもあったのかイ? (黒笑)」

ほ「あ、初めまして。

今度から梗s…先生のお手伝いで来ることになった羊里ほまれです。

「

沖「あの先生の、ねエ……」

沖田はほまれを分析するかの様に見た。

ほ「な、何ですか？」

沖「あんたが選ばれた理由、何となく分かった気がしやすねィ。」

梗「お前まで疑うクチか。」

いつの間にか、梗は部屋に入っていた。

ほ「先生！」

沖「疑ってる訳じゃありません。いい女だと思いやしてねエ。(二)  
ヤリ)」

隊全「(爆弾発言んん!!)」

梗「ウチのモンには手出し無用だ。」

沖「あらら、相当ご執心の様で？(挑笑)」

梗「ガキならガキらしく鬼ごっこでもやってな。(嘲笑)」

かなり仲が悪い様だ。

『ガラッ』

？「お前ら！いつまでサボってんだ！仕事しやがれ！」

隊全「は、はいいいい！」

隊士達は散り散りに去っていった。

梗「相変わらず煙草は止めてないんだな。

敵に隙をつかれても知らねーぞ。」

？「人間死ぬときゃ死ぬんだよ。」

梗「せめて牛乳を飲むようにすれば、カルシウムがストレスを緩和してマシになるぞ。」

沖「それなら、犬とやってそいつに妊s…」

？「何でカルシウム摂る為に、んな遠回りして最低なルート通らなきゃなんねーんだ！！（怒）  
てか犬ってなんだよ！？」

沖「いつも犬のエサ食ってるからでさア。  
ま、メス犬もごめんでしょうけどねィ。」

？「あんだと？！（怒）」

と、その時カスはやっとほまれの存在に気づいた…

？「どうして俺だけけなされるんだよ！」

俺マヨラー嫌いなんだよね〜（- -）／

土「んだとゴラアアア?!」

梗「土方、落ち着け。」

作者の策略にはまるだけだ。」

ほ「…だ、大丈夫ですか?（汗）」

土「別に何ともn…!!」

土方はほまれを見た瞬間、目を見開いた。

ほ「私の顔、何かついてまます?」

土「…何でもねエよ…//」

と、その時

沖「土方さん、死んで下せエ。」

『ドガアアアン』

土「総悟オオオ!!（怒）」

土方は沖田を追いかけて行ってしまった。

ほ「…にぎやかな所なんですネ、屯所って。」

梗「騒がしいの間違いだろ……帰るぞ。」

ほ「はいっ!」

かくして、ほまれの初めての往診は終わった。

ほ「あれ、あとの話は?」

梗「思ったより本題が短くなったらしいな。」

ほ「じゃあ、この後どうすねば……」

梗「俺が解剖講座を開k……」

ほ「それだけはやめましょう!ねっ?!」

梗「ならお前があと埋めればいいじゃねーか。」

ほ「そんな〜（本当に投げやりなんだから…）」

梗「…ほまれは俺が投げやりで、性根の悪い解剖好きの変人としてか  
思っ<sup>て</sup>ないだろ。」

ほ「い、いきなり何ですか？（投げやりのあたり読まれてたアア！  
！）」

梗がにじり寄っていくにつれて、ほまれも思わずあとずさる。

梗「その手前に《男》ってのを忘れてもらっちゃ困るな…（黒笑）」

ほ「え？ちよっ、いくら穴埋めの為とはいえ、これは…あっ?!」

ほまれの背後には壁が…  
ピーンチ^^

ほ「（心配されるどころか楽しんでる?!）ひゃっ?!」

梗はほまれの顔を持ち上げた。明確に言えば、2人は接近状態にあ  
る。

ほ「じっじっ、梗さん…?」

梗「お前、ニワトリかよ。（笑）」

ほ「！／／／」

ほまれは完全に思考がパニックになっていた。

『ピンポン』

ほ「あつ、お客さん来ましたよ?!…って…出なくて、いいんですか?／／／」

動こうとしたほまれを後ろから抱きとめた梗。

梗「どうせ、また迷惑な奴だろ。ほっとけ。」

ほ「だ、だって…／／／」

梗「それに…逃げる口実だって、バレバレなんだよ…(妖笑)」

梗はほまれの耳元で囁いた。

ほ「うあつ…／／／」

?「居留守を使っても無駄だぞ!…何?!死にそうだと?!しっかりするんだ!

エリザベスウウウ!」

梗「…中断だ。」

ほ「今死にそうって…?!(汗)」

『テクテク…ガラッ』

梗「今何時だと思ってんだ…」

？「エリザベスが腹が痛いと言ってるんだ！  
診てくれないか?!」

梗「ハア、さっさと上げれ。」

（20分後）

『ザー…ガチャッ』

？「エリザベス、治ったか?!」

エハすっかり。ヾ

梗「結局ただの便秘とはな。気づかなかったのか？」

？「エリザベスの腹が子を孕んだかのようになっていたのは確かだが  
…」

梗「それまでの過程で気づけよ。」

ほ「とにかく、エリザベスさんが元気になって良かったじゃないですか。」

梗「おかげでこっちは、わざわざ時間外診療だ。解剖してやるのか？あ”あ？”」

＼ほまれside＼

エ「さつきはどうもすいませんでした。」

ほ「いいんですよ、仕事ですから。」

そういえば、エリザベスさん…でしたよね？  
お洒落なお名前ですね！」

エ「それほども。」

では、あなたのお名前も教えてください？」

ほ「ほまれです。羊里ほまれ。」

エ「可愛い名前ですね。」

ほ「そんなことないですよ」(ニコッ)

＼梗side＼

梗「おい、ツラ。」

何勝手にくつろいでんだよ。早くあの未確認生物連れて帰れ。」

桂「ツラじゃない桂だ。エリザベスは未確認生物ではない！」

梗「あんな怪しいモンはそうお目にかかれないが…」

桂「そのように独断と偏見のみで、物事を決めつけるから友人が来ないのだ。」

梗「どいつもこいつも同じことばっか言いやがって…」

桂「そういえば、あの女子は何者だ？」

梗「新しい看護士だ。」

住み込みのな。」

桂「可愛い女子ではないか。まさか…もうチョメチョメしてしまったのか?!」

梗「いちいち言葉が古いんだよ。んな訳ねーだろ。」

桂「興味なさげにして、騙す気だな?その手には乗らんど。本当は、《奴》に匹敵しかねない手の早さがあるだろう。」

そうではないのか?」

梗「人を“どこでも絶倫”扱いかよ。」

桂「そういえば、梗、少し穏やかな表情をするようになったではな

いか。」

梗「…はあ？」

桂「では、失礼する。」

ほ「あ、桂さん！また。」

桂「ほまれ殿こそ、またな。」

桂とエリザベスは帰っていった。

ほ「何か、面白い人達ばかりですね。  
梗さんの周りって。」

梗「バカなだけだ。」

あいつらと同格に見られると思うと憂鬱で仕方ねえ……って、寝  
ちまったか。お休み3秒ってか？しゃあねえな、運ぶか……」

『トサッ』

梗はほまれの寝顔を見た。

ほ「スウ…スウ…」

安心と疲れで熟睡している様だ。

梗「…チツ、診療所の方で寝るか。」

梗は部屋を出た。

(…たく…とんだ迷惑だな。)

狼は自制する。

**変態じゃない！変態という名の紳士なんだ！（後書き）**

（後書き）

いやあ、変態の巣窟が出来上がりました。

梗はかなり恐ろしい存在として認識されてるみたいです。

今まで梗の嗜好物となってしまう者は、1000を超すとか超さないとか…次回も往診編です。

デブって大概実際の体積より3まわり位自分は細いと思ってる(前書き)

サブタイについて作者の一言

いや、実際に近くにいたんで。

デブって大概実際の体積より3まわり位自分は細いと思ってる

梗「……寝不足だ……」

ほ「大丈夫ですか？」

てめーのせいなんだが……

ここ数日、寝不足の日々が続いている。

今日は特にひどく、目眩がまですいてきやがった。

ほ「とりあえず、ご飯食べないと。」

そういつて飯を俺の前に置く。

おふくろかお前は……

梗「今日は、出張往診だ。」

ほ「遠いんですか？」

梗「まあ、マシな方だな。」

ほ「ここ、怪しくないですか?…」

梗「当たり前だ。

ここらは攘夷浪士達の巣窟だからな。」

ほ「じゃあ、出張診察の相手方って…」

梗「攘夷浪士だ。

有名どこのな。」

ほ「真撰組とも繋がってる梗さんの立場って…(汗)」

梗「さしずめ“コウモリ”だな。」

梗とほまれは一隻の船の前に来た。

梗「おい、来たぞ。」

?「ただ今。」

『ガ…』

その後2人は往診を始めた。

ほ「診察終わるの早っ！」

梗「作者がサボっただけだろ。」

ほ「…（汗）でも、本当にただの健康診断でしたよ？」

梗「まだやってない奴らがいんだよ。」

『コンコン』

梗「篠狼だ。いるか？」

？「ああ、入るでござる。」

『ガチャッ』

梗「作曲中か。大丈夫みたいだな。」

？「拙者には主の方が病人のように見える。」

梗「もともと青白いんだよ。」

ほ「（ヘッドホンつけてて聞こえるんだ…）」

？「む…主、いい曲を奏でるでござるな。」

ほ「わ、私ですか？…曲って？」

梗「コイツ、河上万齊つつつてな。音楽界じゃプロデューサーで有名な奴なんだ。んで、相手の雰囲気音楽に例えるクセがあんだよ。」

ほ「……あつ私、羊里ほまれといいます。」

万「……童謡か。」

ほ「…童謡？…」

梗「…プツ。」

ほ「笑わないで下さい！」

そーだそーだ。

お前なんか『ゲロ』だ。『ゼロ』より下の『ゲロ』だ。（\*・・・）  
/

梗「ゲロ吐かせるぞ。」

万「童謡というのは、無垢だということでご覧よ。」

ほ「そ、そうだったんですか…」

万「今の時世、主の様な曲は珍しい。」

ほ「それって、喜んでいいんですか？」

万「中には遠吠えの様な曲を奏でる者もいるでござるよ。」

ほ「それ曲じゃないんじゃ…？（汗）」

梗「悪かったな。曲にならない代物で。」

ほ「遠吠えって…梗さんだったんですか?!」

万「今は随分柔らかいものになったでござる。  
獣の牙が抜け、犬に変わったかのように。」

梗「何で最後に弱々しいの持ってくんだよ。  
…まあいい。行くぞ。」

『バタン』

ほ「あとは？」

梗「3人だ。」

『コンコン ガチャッ』

？「これはこれは。

今日は往診でしたか。

お連れのお嬢さんは？」

ほ「新しくお手伝いすることになりました、羊里ほまれと申します。

」

？「可愛い方ですね。あ、私は……」

『ドガッ』

梗「このロリコン野郎が。汚れるから近寄るな。」

ほ「いくら何でもやり過ぎですよー！」

ほまれはその男に駆け寄った。

ほ「大丈夫ですか？」

？「……」

男は無言で鼻血を流していた。

ほ「わっ?!しっかりして下さい!つて梗さん?!」

『ガチャン』

梗はほまれを横抱きにし、部屋を出た。

ほ「あのままでいいんですか?!」

梗「暴れるな。落とすぞ。」

ほ「…(“落ちる”じゃないんだ…)(汗)」

『コンコン』

?「いるツスよ。」

『ガチャツ』

梗「往診だ。銃の腕は落ちてないか?」

?「バリバリツスよ!

て、新しい看護師ツスか?」

ほ「はい。羊里ほまれです。」

?「来島また子ツス!

今度からよろしく!」

ほ「こちらこそ、よろしくお願いします」

梗「ほまれ、行くぞ。」

ほ「はい。」

『パタン』

梗「次で最後だ。」

ほ「また子さん以外、男の人なんですか？」

梗「みたいだな。」

『コンコン サツ』

ノック直後、梗は障子を開けた。

隻眼に派手な女物の着物を着たその男は、煙管をふかしつつ窓辺に腰掛けていた。

？「無断で入るたア、随分じゃねエかア？」

梗「いつも返事しない奴が言うか。」

ほ「…ケホッ、ケホッ…」

部屋中に煙の香りが充満していた。

梗「…一旦吸うの止める。」

梗「…異常無し。憎まれっ子世に憚るとはこのことだな。」

？「憎まれようが関係ねエ。全て壊すからなア。」

梗「またそれか。」

ほ「……………（やっぱりコミュニケーションも大切だよな…ていうか、壊すって…）（汗）」

？「テメエの連れ、構って欲しそうな顔してるぜ？」

梗「ほまれ、もう少し待ってる。」

ほ「はい…」

あの男の人…会ったことある気がする…

梗「部屋の煙からして、余程嫌なことでもあったみてーだな。」

？「勝手な妄想だ。」

梗「街じゃ、また貼り紙が増えてたぞ。」

《過激派攘夷集団 鬼兵隊 総督 高杉晋助》の貼り紙がな。」

ほ「えっ?!」

この人が…?

梗「どうした。」

ほ「えっと、いや…その…」

ほまれは口ごもってしまった。

高「クク…あん時のガキか…」

ほ「!」

ほまれは驚きつつ、高杉の方を見た。

ほ「私のこと、覚えてたんですか?…」

高「ガキ臭エ顔とタツパは変わらねエなア?（嘲笑）」

梗「…どういう関係だ、お前らは。」

ほ「まだ、私が《あそこ》で働いてた時に…」

〈4年前〉

今日も私は借りられた。

一見、普通のお金持ちの男の人。

来たのは、高そうな小料理亭。

だからこんないい質の着物を着せられたんだ。

しばらく、男に酌をしつつ2人きりの時間が続いた。  
すると…

『ガラッ』

男「待っていましたよ。」

その来訪者に男はそう声をかけた。

その後、難しい話をいっぱいいしてて、30分位経ってから私と男は  
小料理亭を出た。

帰れる…

そう思った瞬間

『ガッ』

ほ「っ?!」

突然、路地裏に引つ張られた。

男「しないつもりだったが、もう我慢できない…」

そう言うと、男はほまれを押し倒した。

こういう日がかかるのは分かっていたが、いざ現実となると全身が震えだした。

ほ「ヤッ…やだあっ！」

必死に抵抗したが、大の男にはかなわなかった。

もうダメだ…

諦めかけたその時

『ザシユッ』

男「う”っ…」

『ドサッ』

男は倒れ込んだ。

ほ「え…？」

咄嗟の出来事にほまれは頭がついていかなかった。

「ガキ相手に欲情するたア、とんだ下衆だな。」

ほまれの目に映ったのは、月明かりに輝く血の滴る刀と、事切れた男を見下す先程の相手方の姿だった。

彼の瞳は、獰猛な獣を飼っている。そう見えた。

ほ「助けて…くれたの？」

？「醜い豚が見えたんでなア。消しただけだ。」

ほ「でも…どうしよう…あたし、一人で帰ったら…」

帰る時は、借主が連れ戻すという規則があった。

一人で帰れば、規則破りという理由で体罰が下る。

ほまれが悩んでいると、

『トヨイツ』

ほ「きゃっ!」

彼はほまれを片腕に乗せ、歩き出した。

ほ「おっおろして!おちる!(泣)」

?「テーマみてエな軽いガキ、落とす訳ねエだろ?」

ほ「…?…ほんとだ…」

?「どうせ足がすくんで立てなかったろ。こっちのが速い。帰るまで俺の話し相手になれ。」

ほ「…うんっ!(ニコッ)」

それから40分ほど話をしていると、着いてしまった。

『ガサッ』

帰ると、番の者がいた。

番「お帰りー。」

アレ？お前、こないいい男と出たっけ？

ほ「あの…」

？「途中で引き継いだ。」

番「そうなんすか？」

でも、うちも商売なんでね…」

すると、彼は懐から分厚い札束を出し、番の前に放り投げた。

番「おお！毎度〜！」

ほまれは彼を送る為、外に出た。

ほ「…ありがとう。（微笑）」

？「久々に長くくっっちゃべっちゃまったなア…」

ほ「じゃあね。」

？「アア。」

ほ「あ、待って！名前聞いてない！」

？「どうせもう会わねェだろ？」

ほ「だから聞くの。あたしは、ほまれ。」

? 「…晋助。」

ほ「晋助…か。いい名前だね!」

晋「そうか?」

ほ「じゃあ…バイバイ!晋助!」

晋「じゃあな。」

暗闇に彼は消えていった。

ほ「…っていつのがあって」

>>>>>>>>> = ( . ) ( . )

梗「そんなことがな…」

( . ) ( . ) = <<<<<<<<<<<<<<<<<<<

梗「…作者、邪魔なんだが。」

だつてさ、無くしちゃつてさ。

梗「何を。」

…青春。

『ボキッ』

いぎゃああああ!!

何するんじゃボケエエ!!

梗「しばらく静かになるな。」

ほ「…(汗)」

梗「そして今日再開したつて訳か。」

高「こんな形での再開は予想つかなかったがなア。」

ほ「まさかまだ覚えてるなんて…」

高「それはこっちも同じだ。」

ほ「とつても印象深かったというか……」

梗「結果をまとめると、《高杉らしくないことをした》って感じだな。」

高「あ”あ？”

梗「ガキを助けたんだろ？らしくないじゃねーか。」

高「最初はほんの憂さ晴らしだったんだが、急にソイツに興味が湧いたんでな……（妖笑）」

梗「面白そうな奴だ、とかか？」

高「あと数年も経てばいい女になると思ってな。（妖笑）」

ほ「！／／／」

梗「武市みてーだな。」

高「アレと一緒にすんな。殺すぞ。」

梗「まったく、物騒な奴。んじゃ、退散するとすつか。」

ほ「あ、ちょっと待ってて下さい！」

『タタタッ』

梗「？」

『パタパタ』

梗「一体何してきたんだ？」

ほ「ちょっとした用事です」

梗「…まあいい。  
行くぞ。」

羊は昔を振り返る。

デブって大概実際の体積より3まわり位自分は細いと思ってる（後書き）

（後書き）

ほまれの過去がどんどん明らかになってきました。それに引き換え、梗は謎が多いですね。

ちなみに、ほまれが言っていた《ちょっとした用事》というのは後に分かります。

次回は…ほのほのいききたいですね。

「う…俺の邪気眼が…」（前書き）

後半あたりがシリアスマがいのものになっています。

「う…俺の邪気眼が…」

梗「おい、ほまれ。

醤油きれたぞ。」

ほ「あ、じゃあ後で買ってきますね。」

今日は特にバタバタしてないのもあって、買い出しに行くことになりました。

よくよく考えてみたら、まだこの街で買い物したことなかったんだった。

梗「これで買ってこい。無駄なモン買つなよ。」

渡されたのは、2500円。醤油以外に必要な物買ったなら、ほとんど残らないなあ。

（スーパー）

ほ「これと、これと…」

変わったのが一杯あるんだな……《お通チップス》？何だろ？

色々な物に興味を示すほまれ。

『ドンッ』

?・ほ「うわっ！」

ほまれは誰かとぶつかってしまった。

?「す、すいません…」

ほ「私こそ…あつ、大丈夫ですか?!」

ほまれは、ぶつかった少年にかけよる。

?「あ…い、いや、だっ大丈夫です…／＼／」

?2「新八一、酢昆布買うアル。デレデレしてんじゃねーヨ。」

?「デレデレしてないから!!もう今月ほとんど予算残ってないん

だよ?!」

?2「このいたいけな少女の願いを聞けないのかゴラァァ!」

『ギャーギャー』

ほ「」

『チラッ』

……お金、2、300円位残るかも……

ほ「ちょっと、2人共!」

?「本当にすいません。  
何から何まで……」

ほ「いいんですよ。  
ケンカはダメですからね。」

?2「優しいアル」。  
どっかのダメガネと違って。」

『ジロリ』

？「露骨にこつち見ないでよー!!」

ほ「まあまあ、落ち着いて。それより、ここ看板らしい物に、《  
万事屋銀ちゃん》って書いてあったのって…」

？「ここは《何でも屋》なんですよ。それで、ここオーナーが自  
分の名前を…」

ほ「……オーナーさんのフルネーム、教えていただけます？」

？「《坂田銀時》です。」

オーナーとは言い難いですけど。」

やっぱり！

ほ「何で言い難いんですか？」

？「何せ、従業員が僕達2人しかいませんしね…」

？2「マダオアル。」

ほ「マダオ？」

「ほまれにいらねーこと吹き込むんじゃねエエ！」

?2「噂をすればマダオネ。」

ほ「銀さん！お邪魔してます。」

銀「おう。それと、俺はマダオじゃねーからな?!」

ほ「《マダオ》って、何かの略称なんですか？」

?「《まるでダメなオッサン》、略して《マダオ》なんですよ。」

?2「ほまれ っていうアルカ。」

ほ「そうです。」

?2「何で銀ちゃん、ほまれのこと知ってるネ?!」

銀「そりゃあ、なあ?(ニヤリ)」

ほ「え?」

銀「もう、あんなことこんなことやっちゃってる仲だからな。」

?「なっ…:…そんな…:(引)」

ほ「いや、え?あんなことこんなこと?特に何もしてないですよよね?」

すると、銀時はほまれの耳元で、

銀「（小声）俺がやった《アレ》、気に入った？（ニヤニヤ）」

ほ「《アレ》……………あ。」

あの服のことだった…

ほ「（小声）き、気に入る訳ないじゃないですか！  
あんな！…なつ、ナース服…／＼／」

銀「（小声）じゃあ何ですぐ返しに来なかったのかな？ほまれちゃん？（ニヤリ）」

ほ「（小声）い、忙しかったんです！／＼」

銀「何はともあれ、着てくれたみてーだしな。  
この辺にしとくか。」

ほ「何で着たって知って！…あ。」

？2「話長いアル。何かあったアルカ？」

銀「ちょっとほまれが俺との熱い夜を思いだ…」

ほ「だから、私は何もやってませんでば！

…とりあえず、今日はおいとまさせていただきます。」

？2「ほまれ、帰っちゃうアルカ?!」

ほ「また来るよ。  
えっと…」

?2「神楽ネ！」

ほ「神楽ちゃんに、新八君、またね。(ニコッ)」

新「はっはい、また…／＼／」

神「またアル〜！」

『ガラッ』

ほ「買ってきましたー。…梗さん？」

『パタパタ』

居間かな？

「うう…」

ほ「?!」

『バンッ』

ほまれの目に写ったのは今までに見たことのない梗の姿だった。

ほ「梗さん?!大丈夫ですか?!」

梗「ぐっ…う…」

何かに抗い、苦しんでいるように見えた。

よほど悪い夢を見ている様だ。

ほまれが起こしてやろうと、梗に触れようとした瞬間

まさしくそれは、刹那の出来事。

気がつけば、ほまれの喉笛の数ミリ先にメスがつきたてられていた。

梗「…ハア…ほまれか…」

メスをつきたてた相手がほまれたと分かると、梗はその場に座り込んだ。

ほ「…何か、あつたんですね？」

梗「…ねーよ。」

ほ「…深くは聞きません。…夕飯、作りますね。」

『コトコトコト…』

いつも、こういう時はあまり喋らない2人だが、今日は特に重苦しい空気が漂っていた。

…私、梗さんのこと、何にも知らないんだ…

確か、梗さんは昔戦争に…戦争？じゃあ、その時を思い出して…でも、何か違う様な…

『フシユーツ』

ほ「あっ！」

ほまれが考えこんでる内に、味噌汁の鍋が吹きこぼれてしまった。

ほ「あゝあ…」

梗さんはボーっとしたままだし…

ほ「梗さん、ご飯。」

梗「…ああ…」

にしても、あの速さ…普通じゃないよね…

梗「ほまれ、食べながら考えごとすんな。消化に悪い。」

ほ「あつ、はい。」

なんだ、そんなボーっとしてる訳じゃないんだ。

ほ「じゃ、えっと…寝ますけど…本当大丈夫ですか？顔色悪いし…」

梗「元々こうだ。」

ほ「…無理はしないで下さいね。おやすみなさい。」

『パタン』

ほまれが部屋へ戻っていくのを確認すると

梗「…出るか。」

本来使わないであろう刀を手に取り、羽織を一枚着て外へと出た梗。

梗「…何度悪夢見せんだよ…ったく…」

狼は夜を彷徨う。

「う…俺の邪気眼が…」（後書き）

（後書き）

はい、今回はぱっつぁんと神楽が出したかったです。  
梗がうなされるくだりは突発的に思いついたのでいれました。  
次回も、パツとしない展開が続くと思われます。

TVとかでインタビューされるとつい見栄を張ってしくじる（前書き）

今回は、唐突に下品なシーンに入ってあっけなく終わります。

嫌な方は避難、OKという方は「そこで切んなやカス」という感じ  
で見てください。

TVとかでインタビューされるとつい見栄を張ってしくじる

梗さんがうなされていたあの日から、早一週間。

もともと冷淡な感じだけど、ここ一週間はさらに『近寄るな』とでも言うように、まわりの空気をピリピリさせてる。

やっぱり、原因とか調べた方が力になれるかも…

でも、誰に聞けばちゃんと教えてくれるだろ？

正直言うと、誰も知らなさそうなんだよね…

考えてばっかりいたって仕方がないや。

原因究明とまでいかななくても、『梗さんのことを知ろう！』的な感じだろうか。

新「篠狼さんですか？」

ほ「そう。何か知らないかな？」

新「そうですね…ウチの酔いつぶれたバカを連れてきてくれた時ぐらいしか会いませんけどね。」

バ、バカ…（苦笑）

ほ「そっか…」

新「でも、篠狼さんは仕事はキッチリこなしてそうですね。羨ましいですよ。」

ほ「そう？…じゃ、ありがとう。またね。」

神「梗アルカ？」

ほ「うん。何か知ってること教えて欲しいんだよね。」

神「なんか、銀ちゃんとかヅラと仲良さそうアル。」

新八君とか神楽ちゃんは、梗さんが攘夷戦争に出てたこと知らないのかな？

ほ「…あとはある？」

神「たまに、チンピラ警察共と一緒にいるアル。」

…チンピラ？え、警察だよな？チンピラの時点で、警察じゃないんじゃない？

神「ほまれは梗のトコの看護婦さんだから、いつも行ってると思うアル。でも、気をつけるヨロシ。」

ひよつとして、《真撰組》のこと？  
チンピラって…

ほ「何で？」

神「きつと、マヨとかサドがほまれのこと狙ってるアル！ほまれは可愛いから要注意ネ！」

ほ「え、そんなに？」

…何となく、予想はついたかな。えつと、あの黒髪の人と、薄茶色の髪の人…あの日から会ってないから、名前…何だっけ？

神「…ちよつと耳かすアル。」

ほ「何？」

神「ここだけの話、梗は何か、ある気がするネ。」

神楽ちゃんも感づいてたんだ。

神「実は、アタシ夜兎族アル。」

ほ「えつ、ホント？」

神「だから、お日様にあんまり当たってられないアル。この傘がその証ネ。」

ほ「そうだったんだ…」

神「アタシの兄貴も、もちろん夜兎アル。

もともと夜兎は傭兵部族だから、闘いたい本能があるのは仕方ないネ。

でも、兄貴はそれが人一倍強いアル。」

ほ「…つまり、梗さんもそういう本能が中に隠されてるんじゃないかってこと？」

神「別に梗を悪く言うつもりは無いアル。でも…」

ほ「…うん、わかった。

正直に話してくれてありがとね。今度、一緒に遊ぼうか。」

神「マジでか?!楽しみにしてるアル!」

桂「うむ、梗のことか…」

ほ「お忙しい中、すみません…」

というか…いかがわしいお店の勧誘みただけど…

桂「何故か、カードゲームでは全く勝てた試しがない。」

ほ「えっ、梗さんカードゲームやるんですか?!」

あの《カードゲーム?やってられっか、そんなモン。》みたいな梗さんが?!

桂「以前はよくやったものだ。最終的にボロ負けになるのが関の山

だったか……」

意外とお茶目な人なのかな……

桂「ほまれ殿は何故そのようなことを聞くのだ？」

ほ「ああ……ちょっと気になっちゃって……」

桂「…何かあったのだな？」

ほ「いや、何て言うか、えーと……また今度ー！！」

ほまれは走り去ってしまった。

桂「……。」

ほ「ハア、ハア……良かった〜バレなくて……」

？「やましいことでもあったんですかイ？」

ほ「ちょっと込み入った事情があつて……で何で普通に独り言に割り込

んで来るんですか!!」

?「そのままだったら、ただの《イタい奴》でさア。」

ほ「イタい人の基準低すぎですよ!というか余計なお世話です!!」

(怒)「

?「アンタ、怒った顔も中々でさア。(ニヤ)「

ほ「バカにしてるんですね?!」

子供だと思って…(怒)

どうせ、この人も16ぐらいでしょ。

ていうか、名前忘れた…

?「それにしても、ほまれはいくつなんデイ。身長からすれば、小5、6ぐらいi「16です!!」(怒)

何で銀さんと言い、あなたと言い、チビ扱いするんですか!」今のほちよっとした冗談でさア。てか、小5、6っていつの、真に受けたんですかイ?」

ほ「うっ受けてないですよ!ちゃんと左から右に受け流しました!」

?「ともかく、ほまれが年下なのに変わりは無いってことでイ。」

ほ「え?!嘘?!」

？「本当でさア。18。」

ほ「まさか…これからまた誕生日が？」

？「もう過ぎやした。」

ほ「そうなんですか、ホッ…でも、確実に2コ上なんですね…」

？「そういえば…ほまれ、まだ俺の名前1回も呼んでないでさア。」

気づかれたアアア！

このままで大丈夫だと思ってたのに！

？「一応、往診で会った時、苗字も名前も呼ばれたんですけどねイ…」

わざとらしく大きく溜め息をつくその青年。

あ、ちなみに、彼の苗字・名前は、梗とほまれが真撰組に往診に行った回で本当に呼ばれています。（携帯なら、3ページ目の29、161行目あたりだと思われます。）

？「まあ、良かったかもしれやせんねエ。」

ほ「え？」

？「もし、普通に名乗っただけなら、ほまれは絶対苗字でしか呼んでくれなさそうでした。」

何でそんなことまで分かるの?!この人?!

?「だから、改めて言いましょう。真撰組一番隊隊長、沖田総悟でイ。ちなみに、下の名前で呼んで下せエ。」

ほ「じゃあ、えっと……そ、総悟、さん？」

沖「何でテンパった上に疑問形なんでイ。」

ほ「だって…改まると緊張するっていうか…」

沖「でも、その呼び方、気に入りました。

新婚夫婦みたいでした。」

ほ「何で夫婦になるんですか?!ノノ」

沖「俺の方は全然OKでイ。むしろ本当にしやすかイ?(笑)」

ほ「しません!

…じゃなくて、今日屯所に来たのは、聞きたいことがあったからですよ!」

沖「…男のスリーサイズなんて、聞く趣味あったんですかイ…」

ほ「だああああ!!」

ちゃんと最後まで聞いて下さい!…真撰組では、新しい人を雇うかどうか判断するのって、一番偉い人がするものなんですか?」

沖「…まあ、ねイ。

でもあの人は、どんな奴であろうと、疑おうとさえしない。」

ほ「じゃあ、その偉い人に『新しく働きたい人がいる』って伝えてもらえれば、もう決まったも同然と。」

沖「俺が決めるんだったら、雇わなそうな奴も多いしねイ。でも、それがどうしたんでさア?」

ほ「ちょっと、その一番偉い人とお話出来ないかと思って。あ、でも忙しいとかなら、いいですから。」

沖「いや、話せませ。今ちょうど毎日の日課を終えて帰って来たところでさア。あ、顔が試合終了直後のボクサーみたいになってるのはスルーして下せエ。」

『ガラッ』

？「おお、総悟！どうした？まさか、その娘はお前の恋人か？」

沖「そうです「いいえ、違います。それで、今日はお聞きしたいことがあって、参りました。「…さり気なく潰したねイ。」

？「俺は、真撰組局長、近藤勲だ。君のような可愛い娘が、こんな男だらけのところは何の用かな？」

ほ「私は、梗さんの助手をしている、羊里ほまれと言います。今日は、近藤さんがなぜ梗さんを雇ったのか、聞かせて頂きたいです。」

近「梗くんか…」

それは、半年ほど前の出来事

近藤は、遠方での用事を済ませ帰路についていた。

あともう少し歩けば、開けた道に出る。

が、それは阻まれた。

浪「真撰組局長とお見受け致す。お命頂戴する！」

10人の浪士に囲まれてしまった。

1人で制することは困難だ。

と、考えていると浪士の1人が火蓋を切って落とした。

『キイーン』

『ザシユッ』

中々に手強い浪士達。

そして、近藤の背には刀を振り上げる浪士。

覚悟を決めたその瞬間。

『ドサドサッ』

浪士達は次々と倒れ込み呻き声をあげ始めた。

「よつてたかつて、潰すなんて、楽しいもんかねえ…げっ、血イッ  
いた。」

そこには、寝間着らしき着物を着た青年が刀を携え、立っていた。

近「まさか、君が助けてくれたのか？」

？「ハッ、冗談を。」

家のすぐ近くで、んな戦われたら、カキンカキンうるせーんだよ。」

確かに、今はまだ明け方。寝ている者の方が多いだろう。

近「…ありがとう。」

？「こんなんで礼言われたのは初めてだな。」

近「それは、君が礼を言われる価値のある人間だという証だ。自信  
を持って！」

？「なに熱血教師みてーなこと言ってんだよ。」

近「君の実力なら、あの浪士達全員を斬ることは容易かったはずだ。  
だが、それをしなかった。」

？「朝は低血圧なんだよ。」

近「うん、気に入った！」

君、真撰組に入隊しないか。」

？「そりゃあ、無理だ。」

俺は医者だからな。  
診療所やってる。」

近「なら、隊士じゃなくかかりつけ医になってくれないか？」

？「まあ、払うモン払ってくれるんなら、やらねエこともねエけどな。

そう簡単にいくかどうか…。」

近「いや、君ならやってくれと信じている。」

？「アンタ、よっぽどのお人好しだな。」

近「じゃあ、君の名前を教えてください。」

？「梗。篠狼、梗。」

近「梗くん、か。」

それじゃ、後日に追って文を送る。」

近藤は再び歩き出した。すると、梗の方に振り返り、

近「これからよろしくなー！！」

梗「…ハイハイ。」

梗は手をひらひら振りながら、長屋へ入っていった。

ほ「そうだったんですね…」

近「梗くんが入ってから、医療班も技術面・チーム力共に上がってきている。人手が足りない時は、襲撃も手伝ってもらったんだが、本当によくやってくれるんだ。」

梗さんは、近藤さんの人柄にひかれたのかな。

近「最初は、心配していたが、今はすっかり隊士共と打ち解けて、安心した。」

こんな人がお父さんだったら、きっと幸せなんだろうなあ。

近「それに、ほまれちゃんが入ってくれたことも大きいぞ。」

ほ「私ですか？」

近「手際が良いし、隊士共にも評判だ。」

問題といえば、看病されたいが為に風邪をひこうとする隊士が増え

つつあるということだな！」

ほ「あははっ、本当ですか？」

近「確かに、こんな可愛い看護婦さんなら、看病されたい気持ちも分かるな。」

ほ「そんなことないですよ。／＼というか、近藤さんは御結婚はされているんですか？」

近「いや、心に決めた女性はいるんだが…気持ちを受け取ってくれなくて…」

いつの間にやら、ゴ…ゴリラに恋愛相談をされるほまれだった。

近「何で言い直したはずなのに直ってないんだアアア!!！」

ほ「まあまあ…(汗)」

差し支えなければ、その方のことを教えて頂けませんか？」

近「そりやもう美しくて、全てを包み込む心があつて、芯の通った女性なんだよ…あ、妙さんていうんだけど、新八君という弟が1人いて…」

ほ「え？新八？」

近「お、ひよっとして友達かい？」

ほ「はい。妙さんの方はお会いしたことありませんけど。じゃあ、

私も何か協力出来るかもしれないですね。近藤さんがそんなに想っているなら、きつと上手くいきますよ!」

近「本当かい? ううっ…ありがとうございます!」

中々に涙もろい近藤。

ほ「あ、もう4時だ…」

今日は、お邪魔しました。」

近「ああ。今日は、ありがとう。」

ほ「ふふっ、いえいえ。こちらこそ。」

沖「ほまれ、話終わっただんですか?」

ほ「はい。」

沖「何か嬉しいことでもあったみたいですね。」

ほ「ちょっと、まあ。」

沖「門まで送りませア。あ。」

『ドゴオオオン』

?「何でいつもこんな登場なんだよ!!」(怒)「

まったく…これだからマヨラーは…」(ハア…

土「マヨをバカにするなアアア!!」

沖「ほまれ、マヨ菌に感染しないうちに早く逃げなせエ。」

土「何汚物扱いしてんだよオオ!!」

ほ「マヨ菌で…」(汗)

とにかく、また今度。」

土「結局、前と同じ切り方じゃねえかアアア!!」

ほ「うん…もう聞けそうな人には聞いたし…」

『トントン』

ほまれは何者かに肩を叩かれた。

ほ「え？だ」「」

？「…あたしツスよ。」

ほ「あ、またくむがっ?!」

何者かはほまれの口を塞ぎ、路地裏の方に引っ張ってくると、口を塞いでいた手を放した。

ほ「すいません！周りにいっぱい人いるのに…」

ま「ちょっと焦ったツス。」

ほ「で、何でまた子さんが歌舞伎町に？」

ま「街の様子を視察してくるよう、命じられたツス。」

ほ「そうなんですか…あ、じゃあちよつとお願いしたいことがあるんですけど…」

ま「何スか？」

ほ「梗さん、俺がどうした。「こ、梗さん！」

2階立ての瓦屋根の上に梗は立っていた。

ま「先生じゃないツスか。どうかしたんスか？」

梗「人の素性をチヨロチヨロ嗅ぎ回ってる奴を捕まえにな。」

ほ「え…まさか…」

梗「バレてないとも思ったか。帰るぞ。」

ま「そうなんスか？」

じゃあ、また今度ツス。ん？どうしたつスか？」

ほまれはまた子の耳元でこう呟いた。

ほ「（小声）お話のことは手紙に書きますね。」

ま「…了解ツス。」

『ヒョイツ』

梗はほまれを脇に抱え、屋根上を走っていった。

ほ「ていうか降ろして下さいってばああああ！」

梗「今俺はちんたら歩いてられるほど落ち着いちゃいねーからな。」

梗は颯爽と屋根上を駆けていく。

ああ、意識が朦朧と…

梗「寝てんじゃねエ。  
投げんぞ。」

ほ「あー爽快だなー！！  
もうギンギンですよー！！」

『ピュオッ』

銀「…今、屋根上を猛スピードで原始人らしき奴が走ってっただけだ。」

新「何で原始人が屋根上なんか走んですか。つか、原始人自体いる訳ないですって。」

…ボロボロの長谷川さんだったら見えなくも無いですけど…」

神「原始人アルか?！」

やっぱり原始人といえばマンモス狩りネ!」

定「わんっ。」

新「いや、何で2人、ていうか1人と1匹原始人に興味示し始めてんの。」

神「マンモス狩りは乙女のロマンネ。」

新「そんな男らしい乙女のロマン聞いたことないんだけど!」

神「レッツゴー定春!！」

定「わんわんっ!」

神楽と定春は出掛けてしまった。

新「まったく…!」

銀「んじゃ、俺もちょっくら行ってくるぜ。」

パ“ピー”に。」

新「普通にパチンコって言って下さいよ！（汗）  
どんだんこの作品が下品になっていくじゃないですか！」

銀「作者が風呂で《よっこらせつくす》とか口ずさんでる時点で、  
もう十分下品な話になってんだよ。」

新「それ暴露したらこれから《狼と羊》見てくれる人いなくなるだ  
ろオオ！！ただでさえ少ないのに！」

銀「もう期待するな。」

結局こうなる運命だったんだよ、俺達は。」

そうそう。諦めなさい。」

新「いや、アンタが頑張れば何とかなることですよ！（汗）」

梗「おい。」

ほ「……………」

梗「無視か。」

ほ「……」

返事がない。

ただのほまれのようだ。

ほ「まんまじゃないですか……」

梗「さつきからどうした。魂の抜け殻みてーなツラしてたぞ。」

ほ「だって、あの帰り方は普通に魂抜けていきますよ……」

梗「ひとまず魂が入ったトコで質問だ。

今日色んな奴らに俺のことを聞いてまわって、何を知った？」

空気が自然と張りつめ始める。

ほ「えっと……たわいもないことばかりですよ？」

そんな警戒しなくてm……」

梗「どーせ万事屋と真撰組の奴ら、あとはツラぐらいだろ。聞きに  
いったのは。」

全部当たってるんですけどオオ……！

ひょっとして、ずっと尾行されて……それだったらもっと早く連れ  
帰されたよね……

梗「あいつらのことだ。

お前の言う通り、たわいもねエ話がほとんどだったろうな。」

ほ「…カードゲーム、するって、桂さんに聞いたんですけど…」

梗「したな。」

ほ「ウソじゃなかったんですか?!」

梗「しちや悪イか。」

ほ「だって、そういうイメージなかったし…

あ、でもいいお話も聞きましたよ。」

梗「…近藤か。」

ほ「はい。前から気になってたので、ちょっと。」

梗「そうか…俺の思い過ごしか…」

梗は、ホツとしたように座り込み、外を眺めていた。

ほ「…」

梗は何か、ある気がするネ。

ほまれの様子をいち早く察知した梗。  
すると、ギロリとほまれを睨みつけ、

梗「…俺に隠しごとが通用するとても思ったか…全て吐け。」

ほ「か、隠しごとなんて…」

梗「俺は気が短ーぞ。」

ほ「…すみません！こればかりは…」

昔の、戦争してた頃なんて思い出させたくないし…

梗「どうあっても吐かねーっつーなら…」

『ドンッ』

梗はほまれの後ろの壁に手を突き立てた。

梗「カラダの方に聞くしかねーな…」

ほ「か、“カラダ”ってそんな…あつ、えっ?!ノノ」

ものの数秒で、着物の帯が外されてしまったことに動揺するほまれ。

ほ「待って下さい…!」

梗は着物にかけた手を止めた。

梗「なんだ、言う気になつたか。」

ほ「…今、理由は知らないですけど、梗さんかなりまいってるみた  
いだったし…このこと話して、余計に梗さんを困らせたくなかった  
んです…だから…」

梗「だから、やめろってか？」

ほ「いえ…いいんです。本当ならとつくのとうに私は死ぬか連れ戻  
されていたんですから。」

それを助けてくれて、生きる場所まで与えてくれた梗さんになら…  
こんなカラダくらい、喜んで差し出します。」

わずかに声を震わせながらも、最後まで言つてのけたほまれ。

弱いのに強い。

そんな妙ちきりんな言葉が頭に浮かんだ。

だとしたら俺は逆だな。強く見せた所で、所詮は弱い。

梗「…あーあ、やる気も萎えちまつたぜ。  
腹くくつた奴なんざ、つまんねーしな。」

ほ「…梗さん…」

梗「オラ、いつまでその破廉恥な格好してんだ。早く整えろ。」

ほ「破廉恥って、梗さんがやったんじゃないですか！！／／／」

梗「帯は外したが、着物ははだけさせた覚えはない。」

ほ「え？…あ。／／／」

着物が肩からずり落ち、下着が露わになっていた。

梗「と、まあとりあえず、一件落着か。」

ほ「ちょっとアクシデントも起きましたけどね…（怒）」

梗「あれはお前がやったんだろ。」

ほ「梗さんが原因であんなったんです！！／／／」

梗「仕方ねエな…じゃあ、俺から直接昔のこと話してやるから、それでチャラだ。」

ほ「…え、本当ですか？」

梗「嘘ついてどうすんだよ。」

ほ「だって、そんなすんなりといくなんて…」

さっきの アレ の意味は…(汗)

梗「まず、ガキの頃からだな。」

狼は語り出す。

TVとかでインタビューされるとつい見栄を張ってしくじる（後書き）

（後書き）

今回はちよつと、長くなつてしまいました。

なるべく、様々なキャラを出したいという気持ち先走り、運動会の借り人競争のお父さんのように転んだ結果がコレです。やっぱり、体っていうのは自分が思つてる以上に、老化が進んでるってことですな。

皆さんのまわりに横断歩道の白線部分で足を滑らせ、転んでるバカはいませんか？

ひよつとしたら、そのバカはこの私かもしれません。

最近は、「ゆう」のつく名前が多い…けどそんなの知るかアアア！！（前書き）

サブタイについて作者の一言

2人の友達のうち1人はそうですね。

え？友達が少ない？

というかその2人もお前の思い込み？

…時には思い込みも必要なんですよ…

「最近は、」「ゆづ」のつく名前が多い…けどそんなの知るかアアア…!

おなかすいたなあ…

あ、おかあさんがたべものをとってきてくれた。

うれしいなあ。

ぼくはおかあさんといっしょにくらしてる。

ほんとうなら《おとうさん》もいるはずなんだって。

おかあさんは、そのことをいつもあやまるけど、ぼくはおかあさんといっしょにいられるだけで、こんなにしあわせなんだから、おとうさんなんていなくてもいいのだ。

この「うる」きになることができたんだ。

おかあさんは、あんなにふさふさしたからだなのに、ぼくはあたましかふさふさにならない。

おかあさんは、たとえしをつかつてはしつたりあるいたりするのに、ぼくはあしだけでもはしつたりあるいたりできる。

どうしてなのかわからなくて、ぼくはおかあさんにきいてみた。

おかあさんは、ちょっとだまってから、“すこしいしつがちがうだけ”っていった。

おかあさんは《にんげん》っていうのがきらいなんだ。

にんげんは、ぼくらをころそうとするんだって。

でも、ぼくはその“にんげん”をみてみたいとおもった。

だから、いままであまりでたことのないすあなからでて、おかあさん  
んをさがしにいった。

『パンツ　パンツ』

ちかくでおとがなったから、そっちにいつてみた。

おかあさんだ！

なにかにおいかけられてる。

あれが《にんげん》なのかな。

そのとき、おかあさんの“にげて”っていつこえと、ちっきのおとがいつしょになった。

おかあさんは、たおれこんだ。

おなかからあかいのがいつぱいでてる。

…今まで、黙っててごめんね…あなたは、お母さんと、同じ“狼”なんかじゃないの…“人間”なのよ。  
どちらに…しても、いつか、こうし、て…別れは来たんだから、あなたは…これから、…全うに生き、て……

おかあさんはぼくにそういって、めをとじてうごかなくなった。

ぼくが……“にんげん”？

いきっていく…ひとりだ…

なんでひとりなの？

おかあさんが“うごかなくなった”から。

なんでうごかなくなっちゃったの？

“しんだ”から。

なんでしんじやったの？

ころされたから。

ころしたのはだれ？

《にんげん》。

ぼくは、いつのまにかかくのきにささっていた、ひかるぼうをとって、にんげんにふりあげていた。

きがつくと、にんげんがいっぱいいるところに行った。

でも、うごかなくなったのがほとんど。

《“しんだ”から》。

おかあさんとおなじように。

あ、まだいきてるにんげんがいた。

にんげんて、うごくのおそいんだなあ。

『ドスッ　　ザシュッ』

ひかるぼうをあたまとおなかにさして、とつたらすぐうごかなくなる。にんげんからでてきたあかいのが、からだにいっぱいついてる。

キタナイ、“ニンゲン”ノチガ。

こんなのが“にんげん”なら、ぼくはおかあさんとおなじ“おおかみ”がいい。

それから、その“少年”の消息はしばらくの間、途絶えた。

ただ、その間にいくつもの町で連続して、猟奇的殺人事件がおきた。狙われたのは、山や森に動物を狩りに行くところとしていた狩人達。

その遺体は、あまりにも無惨なものだった。

数人の目撃者は犯人について、何かを畏れるごとく、異口同音にこう言う。

“ 獣 ” の神が我々人間に制裁を下している。

数年たった後、自我を保てるようになったその少年は、嗅ぎ慣れた匂いのする方向へ歩を進めた。

赤。紅。朱。

それと、屍。

大人の人間と、見慣れない生物が何やら戦っているようだ。

人間の持っているものは少年の持っているものと同じだった。

ならば、この刀はあの生物を殺すためのものなのか。

確かに、ここにいる人間達は自分が今まで殺してきた人間とは違うようだ。

その瞬間、初めて少年の《殺意》というものが“人間”ではなく、“奇妙な生物”に向けられた。

少年は迷いなく、刀を鞘から抜き、奇妙な生物に襲いかかっていったのだった。

なお、この戦いを“攘夷戦争”と言う。

梗「今でも鮮明に浮かんでくる…雪の白に紅がさすあの光景がな。」

ほ「…じゃあ、梗さんは、物心つく前から、その…“狼”さんに育てられて…」

梗「ああ。まあ、俺が10年も前におきた猟奇的殺人事件の犯人だつてのは、2、3年前にようやく分かったけどな。」

ほ「でつでも…不可抗力じゃないですか?!  
理性のないままで、やったことなんだし…」

梗「50人も殺して、か?」

ほ「50?!」

梗「文献にはそうあった。」

ほ「…梗さん、じゃあ、それを真撰組の人達とかが知ったら…」

梗「拷問、打ち首は必至だな。それも仕方ねー話だ。」

ほ「そんな！！…殺したくて殺した訳じゃないのに！」

梗「まあ、バレてないことを心配しても意味ねエしな。そういや、俺の名をつけてくれた《あの女》<sup>ひと</sup>に合ったのも戦争してたころだった…」

梗さんの…名前？

ほ「それまで、名前を名乗ったりは…しなかったんですね。」

梗「あれは確か…」

満月の夜。

俺は、森のはずれあたりの木にもたれかかり、月をただ眺めていた。

先程戦地から引き上げて来る時に人間達が、互いに違う言葉で呼び掛けていた。

どうやら 名前 というものらしく、それは1人1人違うようだ。

俺には………

『ガサッ』

音の鳴った方を振り返ると、そこには女が座っていた。

これといって怪しい訳ではない。だがその存在はどこか、後ろ髪をひかれるものだった。

？「…月を見てるの？」

「あぁ…」

不意に口をついてでた声に自分自身が驚いた。

? 「月つて、落ち着く。」

太陽みたいに、押しつけがましくないし。」

少年はそういった女を見て、今あることに気づいた。

「アンタ…変わってるな、その…髪。」

? 「ん? ああ、これね。」

仕方ないんだー…人間じゃないから。」

女は雪のように真っ白な髪をかき分け、悲しそうに笑った。

「でも、そこら辺の“天人”なんかより、ずっと人間みてーだ。」

? 「それはどうも。」

一応、地球産だから。」

「…人間じゃないのに、地球?」

？「人間が言うところの、“奇形人”って感じね。」

「でも、アンタみたいな奴は、人間の女の中じゃ、“綺麗”っていうみたいだぜ。俺も、よくは分かんねーけど。人間ってのは、分かりにくくてしゃーねーな。」

？「あなたは、人間じゃないの？」

「……知らねー。けど、そうだって言われた。」

？「へー……だったら、良いんじゃない？どっちでも。あなたは別に、人間でいなきゃいけない訳じゃないでしょ？」

「……コクン」

少年は、ゆっくりとうなずいた。

？「じゃあ、不完全者同士ってことね。あたしは、“灯”<sup>ともり</sup>。あなたは？」

「……俺は……」

俯いてしまった少年を見て灯は、こう言った。

灯「…じゃあ、あたしが名付け親ね。あなたは…“梗”なんて、どう?」

「…何でだよ。」

灯「“梗”っていうのは、糸とかが張ってること、それから「桔梗」のこと。」

「桔梗って、何だ?」

灯「秋の花の一つで、薬の原料にもなるの。」

桔梗は紫色の花が咲くから、あなたの素敵な紫色の目とぴったりでしょ?」

「素敵…?」

灯「ええ、素敵。」

それに、あなたにはもっと強くなってほしいから。色んな面で。」

「強く、か…」

灯「それが、“糸”なの。糸って、見た目はすごい細いけれど、張

ると鉄だつて斬れるくらいに堅くなるんだから。」

灯は続けた。

灯「あなたはきつと、とても情が深い子。

今までたくさん辛い気持ちを味わってきたかもしれない。でも、それに負けないで。桔梗みたいに、悪いところを治してあげられるよ  
うな、《強くて優しい》子になって。」

少年の中で何かがぎれた。

「…俺、何で、泣いて…」

少年の瞳からは、涙が落ちた。

灯「その涙は、“うれし涙”っていつの。

せめて今日、この時だけでも、素直になっていいのよ。」

灯は柔らかく微笑んだ。

少年の瞳からは、雫がぼたり、ぼたりと、絶え間なく流れ出た。

「……………う…寂しかった…ずっと…」

灯「そつか…そつか…」

少年の頭を伸び上がって、撫でる灯。

その姿は、本当の親子のようだった。

「すまねえ…」

灯「いいのよ、あたしはあなたの“もう一人のお母さん”なんだから。  
子供が増えるのって、嬉しいことだし。」

「…子供が、増える？」

灯「18の時に、ね。」

人間の男の人との間に出来た子。でも、彼は…」

「灯、さん…一体いくつなんだよ…」

灯「えーと、今、26。」

「26?!もつと若いかと思った。」

灯「褒めても何も出ないわよ。(笑) 女の子でね、8才なのよ。  
だから、梗はお兄ちゃんね。」

「…そいつに、会ってみてーな…」

灯「うーん、今寝てるからね。また今度ね？」

「…分かった。」

少年はわずかに、笑った。

灯「今の顔、すっごく嬉しそうだったわね。」

きつとモテるわよ？」

「からかうなよ、灯さん。」

2人は笑った。

灯「3日後に、同じ時間、この場所で。」

「…待ってる。」

灯は森の奥へと消えていった。

それから、3日後。

約束の場所に行ったまでは良かったが、身体が疲れ果てたため、眠ってしまった。

声が、聞こえる。

「このひと、ねてるよ?」

「静かにしてね。」

起こしたら可哀想だから。」

「はい。」

灯さんの声と、小さい子供の声が聞こえた。

灯「よく聞いてね。」

あたし、別の地に行かなきゃならなくなったの。」

すぐに驚いて声を出そうとするが、眠りの世界から、中々抜け出せない。

灯「でも、二度と会えなくなる訳じゃないから、さよならは言わない。」

灯は、少年を抱き締めた。

灯「…またね。ほら、」 「も、またねって。」

？「またねー！」

ほ「（梗さんが、《さん》づけする人って、いるんだ。よっぽど大きい存在なんだろうな。）」

梗「母親として、女として、あれほどの人はいねーだろうな。」

ほ「…今でも梗さんは、人間が嫌いなんですか？」

梗「さあな。少なくとも、自分が人間だっつーことは、認めてねーよ。」

つーか、人間でも変な奴多いしよ。」

ほ「確かに、この町にいと、そんなの気になりませんよね。」

2人はこの町での出来事を走馬灯のように妄s…思い出している。

梗「…妄想ってなんだよ妄想って。少なくとも俺はしてねエからな。」

ほ「私だっしてませんよ!」

梗「お前は疑わしいからな。自ら誘ったりしt…」

ほ「だから、前回のまた持って来ないで下さい!／／」

狼の道のり、険しきものなりけり。されど、その内に、安らぎなるものぞありける。

最近は、「ゆづ」のつく名前が多い…けどそんなの知るかアアア！！（後書き）

（後書き）

いや、梗の幼少時代を平仮名喋りにしたのは間違いでしたかね。でも、ラッキーだったのは、《名前》ですね。

連載開始当初は、何も考えず《梗》にしましたからね。今回の名前ネタのために、辞書を調べてみたら、結構いいカンジのことが書いてあったんで。桔梗の花はもう奇跡ですね。「え？桔梗の花と、梗の目って同じ色じゃね？」っていう風になって、一気に宝くじが当たったような気分になった訳です。

次回は、重苦しいネタから抜けられると思いますので、まあ…あまり期待もせず、待っていて下さるとありがたいです。

何でも熟れすぎたぐらいが丁度良い(前書き)

サブタイについて作者の一言

別に、熟女が良いとかそういう感じではないですよ。ほら、肉って腐りかけが美味しいっていうじゃないですか。

え、言うよな？

何でも熟れすぎたぐらいが丁度良い

“それ”は、遠方への往診帰りにあの場所を通ってしまったために起きたことだった。

ほ「…こっつて…」

梗「“吉原”だな。」

ほ「男女でお店の中に入っていましたけど。」

梗「仕方ねーだろ。」

「ここはそういう所だ。」

ほ「具体的には?…」

梗「まあ、キャバクラのパワーアップバージョンとでも覚えとけ。」

ほ「あれ?何か、あのお店だけ、ちょっと雰囲気違いますけど、何なんですか?」

梗「…帰るぞ。即刻。」

ほ「え?まだ何m「アンタ、最近めつきり来なくなっちゃったと思

「…あなたは？」

「あたしはい？この一座の座長だよ。」

琥珀コハク「うん。」

「よろしく頼むよ。」

琥珀と名乗ったその女は、金の刺繍の映える黒の着物を着ている。胸元はかなり開いている。

「ほ「梗さんの診療所で、看護師をさせて頂いている、羊里ほまれといます。」

琥珀「看護師、そうかい。あたしゃ、“表”の女が出来たのかと思っ  
たよ。」

梗「表なんざ、出来る訳ねーだろーが。」

琥珀「大体、性格が曲がってるんだよ。アンタは。顔と…ソッチはい  
いんだけどねえ。」

梗「テメエに比べりゃ俺は、真っ直ぐだったの。それと、コイツ未  
成年だから。そういう話少し控える。」

梗はほまれを、チラッと見てそう言った。

琥珀「へえ…随分と可愛い顔してるねえ。」

『クイツ』

琥珀はほまれの顔を上に向かせ、まじまじと見つめた。

ほ「（きれいな人だな…／＼）」

それから琥珀は、梗とほまれを交互に見た。

琥「…うん、決まりだね。」

ほ「決まり、って？」

琥「今度の座で、《五月雨お七》ってのをやるんだけど、主役と準主役が合わなくてねえ。あんたらなら、ぴったりだと思っただよ。」

ほ「座?!てことは、お芝居やるんですか?!」

梗「お前もいい加減治んねーのか、その無茶ぶり。」

琥「どうってことないよ。ちょっと覚えた台詞を紙見ないで言うだけさ。」

梗「俺は何でも屋じゃねえ。あの万年金欠天パにでも頼め。」

琥「アンタじゃないと、イメージが合わないんだよ。こう、あまりがっしりしてなくて、流し目が決まる、端正な顔立ちの男じゃきやねえ。」

ほ「（梗さん結構ストライクなんじゃ…）」

梗「…待て。今、“がっしりしてない”って言ったよな？」

琥「ああ。それがどうかしたかい？」

梗「俺に頼んでる役、“女”の役じゃねーのか？」

ほ「お、女?!」

琥「ほまれちゃん、知らないのかい？座では、自分の性と反対の役についたりすることがよくあるんだよ。」

ほ「じゃあ、女の人が男の人の役をやったりすることもあるんですか?!」

琥「そうだねえ。」

というところで、今回は梗が主役の花魁“お七”、ほまれちゃんは、準主役の一農民の息子“鱗太”だよ。」

ほ「わ、私男役ですか？」

琥「いいじゃないか。」

美女と美男子。

客足を伸ばすためにも、一つ引き受けておくれよ。」

梗「言うだけ言ってる。俺はやらねーぞ。」

ほ「でも、楽しそうですよ?」

梗「ほまれ、お前はまだいいかもしれねーけどな、男が女の格好をするのにどれだけの抵抗があるか分かるか？」

ほ「でも、かなり必死ですよ、琥珀さん。」

梗「アイツはんなタマじゃねえよ。行くぞ。」

梗は先にスタスタと歩いていってしまった。

ほ「冷たいんだから、全く……」

琥「でも、随分とよくなったんと思うよ。

前はもつと、ひどかったからね。」

ほ「（皆言ってるってことは、本当に変わったんだ、梗さん。）」

琥「そう言えば、“五月雨お七”は2週間後にやるんだ。絶対来とくれよ。はい、台本。」

琥珀はほまれに台本を渡した。

ほ「じゃあ、2週間後に。」

ほ「「ち、近くの村から、歩きで……」」

梗「…」

ほ「梗さん！ちゃんとやって下さい！」

梗「昨日表通りを酔っ払い担いだ…」

ほ「“酔っ払い”じゃなくて、“勘さん”ですよ！しかも地声じゃないですか！」

梗「ナイスツツコミー。」

台本を貰ってから、4日。日中は患者さんが来るから、夜に練習しています。でも、梗さんが…

梗「いいだろ。どーせ行かねえんだ。」

ほ「絶対行きます。

それでもって、梗さんも一緒に行くんですよ。」

梗「何でまたそんなやる気バリバリなんだ、お前は。」

ほ「だって、こんな機会滅多に無いし、面白そうですよ。話は笑える内容じゃないですけど。」

梗「まあ、所詮世の中なんて、こんなモンだけだな。」

ほ「…ちょっと言い方悪いですけど、そういうので上手くいったの  
っていったら、“玉の輿、逆タマ”とかなんでしょうね…」

梗「そして、金をむしれるだけむしって、おさらばって訳か。」

ほ「不景気の今でも、玉の輿とか狙う人達もいる訳だし、こういう  
対極的なお話見てると、ちっぽけに感じますよね。」

梗「俺からするに、女は気だてだろ。」

ほ「（え?!意外に内面見るタイプ?!）」

梗「性格がよけりゃ、外面にも多少は影響する。どうでもいい時に  
は、顔と性格が反比例してる女にするけどな。」

ほ「…その、“どうでもいい”時ってというのは、何なんですか?」

梗「性欲発s「あーはいはい!わかりました!」勝手に割り込んで  
くんなよ。」

ほ「（…男の人って、やっぱりそういうものなんだ…）」

梗「ただ、本気で狙うなら、どっしり構えたような女だな。」

ほ「どっしり?」

相撲?そんな訳ないか…

梗「肝っ玉が座ってるってことだ。」

ほ「へえ〜。」

梗さんて、やっぱり変わってるなあ。

梗「カラダの相性ぐらいは、ねじ曲げてでもよくする。」

ほ「へえ〜……って、ちがうと言わないでよ……」

『ピンポーン』

ほ「ごめんください。」

『ガラッ』

？「ほまれさんじゃないですか！どうしました？」

「えっと…今日は、遊びじゃなくて、ちょっとした依頼で来たんです。」

？「依頼ですか？じゃ、とりあえず中に。」

ただ今奥の手実行中。

この人達なら、梗さんよりは力になってくれる、はず！

銀「で？その芝居練習に、梗が付き合わねーってんで、依頼に来た訳か。」

神「冷血野郎アルな。」

ほ「当日になったら、引きずってでも行く予定だけどね。」

新「でも、何でまた吉原にいたんですか？」

ほ「出張往診の帰りで、近道するために通ったら、声をかけられて最近客足が遠のいてるとかで、手伝えるなら手伝おうと思ったんです。」

なのに、梗さんときたら…」

銀「まあ、仕方ねーんじゃないの？アイツ、そういうの嫌いだし。」

ほ「確かに、私も抵抗はあると思いますけどね。女の役じゃ。」

神「え？！男が女になるアルか？！」

ほ「女の人が男の人をやることもあるんだって。梗さんは、何とか回避しようとしてたけど、無理だったみたい。」

銀「ただでさえプライドの高いあの梗が、女役か?…ぷつ。」

ほ「がつしりしてなくて、端正な顔立ちで、流し目が決まるような人がいいらしくて。」

もしこつというのが言われてなかったら、今頃銀さんがその、女役になってたかもしれませんか?」

銀「何でよりによつて俺なんだよ!!」

ほ「だって、梗さんに「“ 万年金欠天パ” って、誰ですか?」って聞いたら、銀さんのことだつて言つてたんですよ。」

銀「万年金欠も天パも余計なお世話だつつーの!!」

新「てことは、ほまれさんも役柄は男だつたりするんですか?」

ほ「一応。準主役で。」

神「結構目立つポジションアルな。」

ほ「主役は、梗さんなんだ。」

すると、ほまれの持つてきた台本をパラパラと捲りながら、

銀「コレ、意外にラブシーン多くね？ほまれ、梗とこんなシーンやんのか。」

ほ「し、しょうがないですよ…／＼」

神「ほまれ、梗に　　《ピー》されて　　《バキューン》する  
アルか？」

新「神楽ちゃん？！

何とんでもない言葉口走ってんのオオ？！

自主規制音かけるなんて一大事だからね？！」

ほ「そつそつん…え？／＼／」

新「もうさっきのことは忘ましよう、速攻…！」

銀「まあ、やりかねねーよな、アイツなら。

じゃあ、俺がその前に、　　《ピロリロ》しとかねーとな。」

新「オイイイイ！！何で自主規制音かけた会話しかできないんだアアア！！」

この後、まともな練習が始まったのは、一時間後だった。

ほ「今日はどうもありがとうございました。」

新「いいんですよ。

こっちこそ、落ち着いて練習させてあげられなかったし。すいませ  
んね？ホント。」

ほ「何か、肩に入ってた余分な力が抜けて、良かったですよ。あり  
がとうございました。（ニコッ）」

新「あ、いや、その…／＼」

神「ニヤニヤしてんじゃねーヨ。ムッツリメガネ。」

新「ニヤニヤしてないからね?!」

ほ「でも、依頼料がタダなんて、商売上がったりじゃないですか？」

銀「俺達の仲だろ？こんなことぐらいで金なんて、とらねーよ。」

神「気をつけるアル。

良い奴だと思わせて、罠にかかった所をガブリといくつもりネ。」

銀「お前何勝手に変なこと吹き込んでんだよ！

一応俺は誠意を持ってだな。」

ほ「お邪魔しましたー。」

ほ「この患者さんは、血糖値が高いですね…」

梗「食事の改善が先だな。」

今やっているのは、今日来院した患者さんの病状と、大まかな改善法の確認。

仕事の時は、真面目だし、患者さんに向き合う姿勢も、いつもとは大違い。医術面に関してなら、尊敬に値する人なんだけどなあ…

ほ「もったいないですね…」

梗「なんだ、今日の味噌汁に入れたキャベツの虫食いがひどかったことか。」

ほ「そつちじゃないですよ！それに、あれは中に青虫がいたんです！しかも、驚異のスピードで食い荒らしてたんですよ?!」

梗「最近は、虫型天人も珍しくない。」

ほ「あれ、天人だったんだ…」

途中に不真面目な会話が入るも、すぐ2人とも真剣な顔つきに戻る。

何か面白いことやれよ。

ほ「一応今仕事やってるシーンですよ…(汗)」

梗「それなら、お前自身が泥鯱すくいでもなんでもすりゃいいじゃないか。」

何でこつちがやらないといけないんだよー。

私は常に何でも人に押しつけるのがモットーなのだよ…フッ。

梗「ほっとくぞ。」

ほ「はい。」

オイちよつと、君たち？

冷たすぎやしないか？

おい…

聞いてEEEEEEEE!! (泣)

ほ「はあ……もう30日後ですわ。マア。」

梗「言うな。」

ほ「いい加減、素直に受け入れたらどうですか？  
私は、似合うと思いますよ。」

梗「ぜってー受け入れねーよ。つーか、トングズラするか？」

ほ「それはダメです！

絶対梗さんも連れて行きます。」

梗「じゃあ、俺が出す条件をお前が呑むなら、行くの検討してやる。」

「

ほ「何ですか、その上から目線。今の梗さんは、母親におもちやを  
ねだる子供と一緒にですからね？」

梗「んじゃ、千歩譲って条件呑んだら行ってやるよ。」

ほ「もう…それでいいですよ……あ。」

ほまれは、何かを思い出したように立ち上がり、

ほ「おやすみなさーい。」

『パタン』

梗「なんだアイツ……」

『コンコン』

? 「失礼します。」

『ガチャッ』

? 「お手紙が届きました。」

? 2 「どうもッス。」

『ガチャン』

此処は、鬼兵隊幹部、来島また子の自室である。また子は、鬼兵隊内で唯一の女ということ、このような友人との手紙のやり取りの時ぐらいが、自分も女子なのだ実感出来る瞬間であった。

? 2 「今回は…」

『パラッ』

また子さんへ

いつも聞いていることですけど、お元気ですか？  
こっちは、相変わらずです。それと、今回は面白いことがあったので送りました。諸々の事情で、お芝居をやらせてもらうことになり

ました。

吉原っていう所にある座の座長さんに、「イメージにぴったりだ」  
って言われたんですよ

でも、お芝居って男の人が女の人の役やったりするんですね。また  
子さん知ってました？

それで、お芝居の公演が3日後なんですよ。

多分また子さんのトコにこのお手紙が届いた頃には、2日経ってる  
から、明日ですね。

何か、その座が最近、お客さんが減ってきて困ってるみたいなので、  
がんばります！！

ホントはまた子さんにも見に来てもらいたかったけど、無理だと思  
うので、心の中で応援して下さい。他の鬼兵隊の皆さんにもよろし  
くお願いします。

ほまれより

ま「明日…確か、商談があるはず……」

と、その時。また子は、自室の扉の外に何者かの気配を察知した。

いや、よく知った気配だが…

『バンッ』

また子は自室の扉を勢いよく開け放った。

?3「うっ!!」

扉の外側で、聞き耳を立てていたその男は、背後の壁に衝突した。

ま「何勝手に人の部屋の外で聞き耳立ててんスか? 武市変態。」

“武市変態”と呼ばれたその男は、無機質な目で鼻血を拭きながら、

武「変態ではなく先輩と呼びなさい。なぜか、また子さんの部屋に、私のロリク…フェミセンサーが引っかかりましてね。」

また子は、手に持っていたほまれからの手紙をチラッと見ると、

ま「もうそんな領域まで到達したんスか…」

武「何ですかその蔑むどころか同情するような顔は。」

ま「そういえば、明日の商談って“吉原”で間違い無いんスよね?」

武「何回言えば分かるんですかあなたは。」

そうです、吉原です。

全く、これだから猪女は…」

『チュインツ カンツ』

素早く抜かれた拳銃から放たれた弾は、武市の顔を掠めた。

ま「ロリコンに言われたくないッス。」

『ガヤガヤ』

座の控え室では、2つの各部屋で、中が騒がしかった。

片方では…

「…これでよし、と。」

「わー！可愛い〜！！」

ほ「そ、そうですか？」

田吾作へアーに動きやすい甚平という格好だったが、七五三にも似た雰囲気があり、これはこれで面白い。

「でも、結構イケメンじゃない？」

『ガラッ』

琥「準備し終わったかい？」

「はい。」

琥「中々、様になってるじゃないか。

…ほら、アンタも早く来なよ。」

？「うるせーな…」

琥珀の後に現れたのは、

ほ「…えっ、梗さん?!」

琥「似合ってると思わないかい？」

ほ「はい!きれい…!」

梗「きれいなモンか、こんなん。」

琥「もうすぐ開演だ。

行くよ。」

公演は、本人達が思った以上に滞りなく進んだ。

客席では、やや騒がしい所もあったが…

A地点では…

銀「（小声）え?!マジで梗なのかアレ?!」

新「（小声）みたいですよ。やっぱり、もとが違つと変わるんですね…」

神「（小声）きつと女装が趣味だったアルよ。」

新「（小声）いや、勝手に決めつけちゃダメでしょ!ていうか、聞こえたらどうすんの?!」

万事屋一行は、ほまれの《客足が遠のいてる》という一言で、座へ足を運んだのだった。

B地点では…

?「（小声）…副長。

攘夷浪士達、全く現れる気配がありません。」

すると、マイク越しに、

? 2 「ガセネタだったみてエだな。あと30分で現れなかったら、座の外を確認しに行け。」

? 「(小声)了解。」

男は、トランシーバーをしまい込んだ。

? 「…副長、役者の写真なんて何に使うんだ?」

座の天井の梁から会場全体を見回しているこの男は……この男は……誰だっけ?

? 「いくら地味だからって、ここで忘れるの?!」

…あ、やり直すわ。

この怪しげで地味な男は、山崎退。真撰組の監察だ。今回は、監察の仕事の一つである潜入捜査のため、“攘夷浪士が商談を座内でする”という情報を受け、こうして見張っているのだった。

山「もう犯罪者扱いに等しいよね」レ……」

C地点では…

? 「…ほオ…面白そうなトコじゃねエか。」

? 2 「まだ商談相手は来ていないようでご覧な。」

? 「俺ア、端から商談なんざに興味はねエ。

物色するために来たんだ…色々なア…（妖笑）」

? 2 「酔狂もほどほどにするでござるよ…」

不敵に笑いながら、隻眼の男は座の特別観覧席へと歩いていった。

一方、サングラスをかけた男と金髪の女は、

? 2 「…聞いたことのある音色が…」

? 3 「ここからでも、よく見えるツス。」

金髪の女は、手すりからやや身を乗り出し、舞台を観る。

そう、真撰組に入った情報“攘夷浪士の商談”とは、鬼兵隊と、あの攘夷浪士グループの商談のことだった。

万「あれは…梗殿とほまれ殿でござる。」

ま「あれがほまれ？だとすると…あの女、先生じゃないスか？」

万「また随分と化けたものでござるな…」

再びB地点。

山「（小声）あ、攘夷浪士が来ました。

…！副長！片方の攘夷浪士、よく見たら“鬼兵隊”です！」

土「鬼兵隊？！わかった。速急に向かう。」

山「（小声）了解。」

その瞬間。

ゾクリ。

背筋の凍るような、不気味な感覚が山崎を襲った。

山崎は、何か恐ろしく危険なものを感じ、

山「（小声）副長！至急突撃を中止して下さい！」

土「はあ？せつかくの逮捕の機会をみすみす逃すつもりか？」

山「（小声）とにかく、今突撃したら、危ないんです！」

山崎の切迫感溢れる声に、土方も何かを察し、

土「…わかった。

生きて帰って来い。」

山「（小声）了解。」

公演は、無事終了した。

観客席は拍手が、中々鳴り止まなかった。

ほ「梗さん、大成功でしたね!!」

梗「もう二度とやらねえ。」

琥「いや、あんなに盛況だったのは初めてだよ。ありがとうね。」

ほ「いえいえ。」

梗「ほまれ、俺が言ったこと忘れてねーよな?」

ほ「言ったこと…ああ。条件ですか?」

梗「そうだ。」

ほ「梗さん、ちゃんとやってくれたし、何でもいいですよ。」

梗「おい。」

梗は琥珀に何かを耳打ちした。

琥「ふうん…楽しそうじゃないか。」

梗「任せたぞ。」

梗は《外にいる》と一言だけ言い放つと、控え室を出て行った。

ほ「琥珀さん、梗さんに何言われたんですか？」

琥「それは、今からやることが終わってからだよ。」

ほ「？」

琥「ちょっと！いつまでもうっとりしてないで！」

座1「だつてえ〜、かつこいいんですもの〜。／／／」

座2「座長が1人で準備して連れてきたからあ、もとがあんな色男だなんて〜、ずるいい〜。／／」

琥「そつちは早く忘れて、この娘の着つけ“しつかり”と、頼むよ。」

座1「りょーかあい。」

ほ「え？私1人でも着つけ出来」…」

座2「だあめ。あたしたちじゃないと、“しつかり”やれないもの〜。」

座員の女2人は、ほまれを椅子から畳上に連れて行った。

ほ「い、一体何をするつもりなんですか？（汗）」

座1「あたしたちはあ、色男の他にも好きなのがいるの〜。」

座2「何かわかる？」

ふるふる。

ほまれは首を横に振った。

座1・2「正解は？」：“可愛い女の子”です。」

そう言うと、座員2人は作業に取りかかった。

ここからは、卑猥な表現等が少々入りやがりますが、なるべく最低限に抑えていますので、ご了承下さい。

座1「かーわい」

ほ「え？どっどこ触って？！／／／」

座2「発育、スタイル関係にとられちゃったカンジ〜?」

ほ「ダメですってば!ちょっと!…んっ…／／／」

琥「よいしょっと…化粧終わり。あら、結構な別嬪さんになったんじゃないかい。」

ほ「(よ、ようやく終わった…／／)」

琥「ちょっと、鏡見てごらん。」

ほまればあまり進まない気持ちで、鏡に目をやった。

ほ「!」

鏡に映っていたのは、艶やかでありながら、可愛いらしい少女の姿だった。

琥「嬉しいかい?」

ほ「自分じゃないみたい…／＼」

『シヤラン』

ほ「あつ、かんざし！」

琥「気に入ったんなら、簪とその着物、もらっとくれよ。」

ほ「そんな、私になんて、もったいないですよ！」

琥「いいんだよ。」

あつても全然使わなかったんだから。人の好意は素直に受けとくもんだからね。」

ほ「そうですか？」

じゃあ、ありがたくもらわせて頂きます。」

琥「それじゃ、梗のとこ行きな。」

ほ「はい、お疲れ様でした！」

座1「また来てね。」

座2「ほまれちゃんならあ、大歓迎だから。」

ほ「は、はい！（ちよつと遠慮したい気もするけど…／＼）」

梗「まだか?…!」

琥珀に“例の”ことを頼んでから、かれこれ25分。

気合い入れてやってるにしたって、そろそろ俺もイライラしてきた。  
勝手に帰るぞコラ。

などと、やや説明混じりにイラつく梗。

ほ「すいませーん!!」

座から、ほまれが掛け出てきた。

梗「オイ、遅ーぞ。」

ほ「色々本格的にやってくれて。」

梗「そうか。」

梗は、ほまれの姿全体を凝視した。

ほ「…変、ですか?…」

梗「とりあえず、行くぞ。」

踵を返す梗。

ほ「え、行くってどこn…わっ!」

ほまれの腕を引き、人混みを抜けていく梗。

大分落ち着いた通りに出た。

梗「ったく、無駄に人が多過ぎんだよ。」

梗とほまれば、ある店の表の長椅子に腰掛けた。

ほ「何で人の少ない所に?」

梗「ああ人が多くちゃ、落ち着いて吉原の店にも入れねえ。」

ほ「あ、店に…」

梗「それに…」

一拍置いて、

梗「俺がお前にこんな格好させた訳も、話せねえしな。」

ほ「訳なんて、あつたんですか。」

梗「何分、お前にはまともな着物一つ、買ってやってなかったらな。たまには女らしく着飾るってことを、やらせてやりたかったただけだ。」

え？！マジで？！

梗「何でまずお前が食いついてくるんだよ。マジに決まってるんだろ。」

…へっ、どうせ嘘だな。

ほ「…どっちですか？」

梗「嘘言ったってしゃーねえだろ。」

ほ「ほ、本当だったんですね…。」

梗「それがどうした？」

ほ「あの、ありがとうございます…／＼」

ほまれは、いつもの梗からは考えられない優しさにしどろもどろだ。

梗「まあ、年相応ぐらいにはなったな。

俺は店で見たいモンがある。ちょっと店の前で待ってる。」

ほ「え、私着いて行っちゃダメなんですか？」

梗「ガキには早い世界だ。」

ほ「ガキって、ええ?!」

梗は店へ入ってしまった。

ほ「ガキには早いつて…」

ほまれは、店の看板を見た。

ほ「え…“刃”<sup>ジ</sup>?…刃物取り扱い店?!」

入るなって、こういうことだったんだ…

確かに、あんまり入りたくないな…(汗)

ていうか、“年相応”って…本っ当に失礼!!

？「オイ、その女。」

ほ「え？」

細い路地から、自分を呼ぶ声。てか、“あの人”だし！

路地に駆け込んだほまれ。どうやら知り合いのようだ。

ほ「高杉さんじゃないですか！！」

高「随分と色気づいてんじゃないやねエかア？」

ほ「これは、かくかくしかじかありまして…／＼」

やはり、ほまれにとって今の格好は、少し気恥ずかしいものなのかもしれない。

ほ「というか、何で吉原に？」

高「面白エ奴がいねエか、寄ってみただけだ。

面白エ奴は、とりあえず見つけたがなア…」

ほ「それって、まさか…違いますよね？」

高「テメエの予想、当たってるぜ？」

ほ「いや、面白くないですから。きっと考え違いです。」

高「そういう所が面白エって言ってんだ。

にしても、堅苦しい呼び方するようになったなア？あの時は、いきなり名前呼び捨てだった癖によオ。」

ほ「あの時は忘れて下さい！態度がなってなかったただけです！／／」

高「まあ、今の方が少しは女らしくなってんじゃねエか。タツパは小せエまんまだがなア。」

そう言うと、高杉はほまれをからかうように喉を鳴らして笑う。

ほ「成長期には個人差があるんです！（怒）」

すると、煙管を蒸かせながら、

高「背は小せエ癖して、乳だけでかくなつちまってるたア、もう成長期云々は関係ねエンじゃねエかア？（妖笑）」

ほ「ちt…胸は勝手に大きくなつたんです！！／／／」

突然出てきた如実な単語に、どもるほまれ。

高「俺は、嫌いじゃねエなア。」

ほ「？」

すると、ゆっくりとほまれの方を見つめながら、

高「ほまれみてエな奴はな。」

と言った。

その一つだけの瞳は、じつとほまれを見つめたままだ。

人間とは不思議なもので、相手に対して秘密を抱えている、または強い関心があると相手の視線から逃がれようとする傾向がある。

今のほまれもそうだった。

というより、秘密しかないような状態だろう。

それを見た高杉は、目を細めて、

高「七変化たア、このことだな。野郎の格好もしてたしなア？」

ほ「あ、あの座にいたんですか?!」

高「テメエの他にも、面白エ奴がいたなア。」

梗「今日は厄日か。」

ほ「あつ、買い物終わったんですね。」

高「そこら辺の豚に比べりゃ、ずっと女に見えたぜ?」

梗「研ぎ直した“コレ”で解剖されたいのか。」

梗は、懐からメスを取り出した。

演劇を見られたことに、かなり腹立たしさを感じているようだ。

高「生憎、今はそんな気分じゃねエんでなア。

“熟れ具合”を見にきただけだ。」

ほ「熟れ？」

梗はそれが何か分かると、

梗「…本当に物好きだな、お前。」

高「テメエが言えた義理かア？もう気づいてんだろ、コイツの“面白さ”って奴によオ…（妖笑）」

それだけ言うと、高杉は細い路地の先へと歩いて行った。

梗「悪趣味野郎が…（怒）」

ほ「一応褒めてくれたんですよ。」

梗「ハッ、アイツが褒める？有り得ねえよ。

嘲笑ってるの間違いだろ。」

ほ「素直に受け止めないんだから…じゃ、帰りますか。」

梗「だな。」

狼と羊は化ける。

何でも熟れすぎたぐらいが丁度良い(後書き)

〜後書き〜

今回は“色々なことに関して、申し訳ありませんでしたって言うてみよう”会です。まずは私の存Z：中身がかなり伸びたことです。自分的にですが。そして、変態女達の登場。あいつらの喋り方は、はっきり言って現実だったら、中枢神経ぶち切れてますね。ということ、見てくれた方、ありがとございました。次回もちよっとお楽しみにね!!

いつも怒らない奴が怒るとマジで怖い(前書き)

私のモットーは

“真選組”変態”

です。そのあたりを踏まえてご閲覧下さい。

いつも怒らない奴が怒るとマジで怖い

ほ「梗さん…行かないとダメなんですよ。」

梗「“あの時”、知ってる奴の気配がしたんだ…絶対真選組の監察あたりが来てた。」

ほ「だからって、往診行かないなんて、シバかれますよ。特にあの、黒髪の人あたりに。」

梗「俺がただシバかれるかよ。アイツの目の前で、マヨネーズ1本絞りきってから逃走してやる。」

ほ「マ、マヨネーズ好きなんですか？あの人。  
それじゃ、火に油注いでるだけじゃないですか…」

結局、1週間ほど前にあった“あのこと”が真選組にバレていないのを祈り、往診に出た。

むさ苦しい男だらけの屯所も、週1回のこの日だけは、わずかに華やぐ。

仕事柄（+見た目）から、彼女も出来ない男達も、ほまれを見ると“元気になる（いろんな意味で）”らしい。

もう一つ、隊士内で開かれている会があった。

“《ご、ごめん！不可抗力で…》的な感じで、ほまれちゃんの体のどっか触りたいから、どうしよう”会だ。

中二男子並の妄想の塊である。

しかし、ほまれは中々手強いようだ。

今まで、綿密に作戦を練り、実行してきたが、悪いタイミングで、邪魔が入ったり、ほまれが動いてしまったりなど、未だに1回も成功していない。

成功しない作戦。  
膨らむ妄想。

隊士達はどれだけその妄想を“オカズ”にしたことか。

マッサージしてもらって、触られるのもいいけど、やっぱりじつ  
ちも触りたい。

一隊士の言葉だ。

近「はあ……」

ほ「…ひょっとして、お妙さんの？」

近「いや、それもそうなんだけどさ……今日起きたら、枕から“か  
のつく匂いがしたような気がして……俺、年なのかなあ……」

ほ「えーと…昨日の夜に布団の上で、懐かしい本とか読んだりしました？」

近「そういえば、昔つけていた日記を、引っ張り出して見たっけか。」

ほ「実は、その加「…か」のつく匂いというのは、よく“ロウソク”、“古本”、“チーズ”などの匂いに例えられているんですよ。」

近「じ、じゃあ、俺はまだまだバリバリいけるんだな?!」

ほ「はい。」

近「うっ…良かった…ありがとう！ほまれちゃん！」

近藤は、ほまれの手を掴みながら号泣している。

『ドガアアア』

近「うわああ!」

近藤に命中しそうになった弾は、飛び退いた近藤とほまれの間を突っ切り、後ろの障子を貫通した。

現れたのは…

沖「そういえば、今日は往診の日だったねィ。」

ほ「ていうか、いきなり何してんですか!!  
近藤さん、死ぬ寸前でしたよ?!」

沖「違いやす。俺は、その部屋ん中にいる野郎を亡き者にしようとしてたんでさア。」

先ほど撃たれたバズーカ砲の弾が貫通した障子が開いた。

土「総悟! テメエ、何見回りサボって俺を亡き者にしようとしてんだ?!」

ほ「あ!」

ほまれば、………土方を見て声をあげた。

土「何で俺の名前ナレーションするときだけすごい泣いてんだアア  
!!!

…ハア、何か用か。」

ほ「あ、えつと…何でもありません。」

梗「帰るぞ、速急に。」

ほ「あ、終わっただんですね。」

沖「そんな急いで、真選組から離れようとして、何かあったんですかイ?」

と、そこへタイミングを見計らったかのように、

山「副長ー！！現像終わりました。」

梗「>ピクツ<現像？」

土「1週間前に、吉原で浪士達の商談があつたらしくてな。」

沖「役者まで撮ってありやすぜ？さては、自分のオk……」

土「んな訳ねエだろ！！」

役者の中にも浪士が紛れてたら、しょつぴくためだ。」

その数枚の写真には、梗とほまれの姿もあつた。

ほ「！」

梗「……」

すると、沖田はこんな発言をした。

沖「コレ、本当はチビの方が女で、背高い方が男なんじゃないですかイ？」

近「何？！この小さい方はともかく、この人が男？！」

土「まあ、座なら有り得る話だな。」

ほ「（小声）梗さん、バレそうですけど。」

梗「（小声）トンスラするぞ。」

梗とほまれがトンスラしようとしたその時。

? 「待てこのクソ犬!!」

? 2 「ここ私有地ですよ!」

? 3 「アタックネ! 定春!」

? 4 「わんっ!」

『ドンッ ガラガラッ』

突然真選組の塀の一部が崩れた。

ほ「あれって…」

砂煙の中から出てきたのは…

銀「見失っちゃったじゃねーか、お前が騒音立てたせいだ…」

定「わんっ。」

『ガブツ』

神「定春は立派だったアル。ね、定春？」

定「バウツ。」

銀「ちよっ、かぶりついたまま鳴くのやめてエエ！耳に響くからアア！！」

新「また依頼料ゼロか…」

なんと、万事屋一行だった。

土「何でデメエらが塀壊して入ってきてんだゴラ。人の家に行った時は、ちゃんと玄関でインターホン鳴らしてから入れって母ちゃんに教わらなかったのか？あ”あ？”

銀「生憎俺のおふくろはサプライズが大好きでなあ、必ず玄関以外のどこかを壊して入りなさいって小さい頃から言われてんだよ。」

土「そんな訳ねエだろ！！どんだけまわりに恨み持ってただよ！！」

神「ほまれ！見たアルよ！」

ほ「見た？…まさか、座に？」

新「ほら、その座が客足遠のいてるって言ってたから、皆で見に行こうってことだ。」

沖「座、ということとは…それを知られなくなかった訳で早く帰ろうとねエ。」

銀「お前があんな格好するとは思ってなかったぜ。…ぶっ。」

神「男の役でも、ほまれは可愛かったアル！」

ほ「…もう無理ですよ。言い逃れは。」

梗「…チツ。あの女…」

その後、皆その話題で盛り上がったのは言うまでもない。

土「静かになったところで、本題に入…て、何でまだお前らがいるんだ、万事屋。」

銀「帰ったら、またババアに家賃のことでどやされちまうからな。」

土方は、梗とほまれの方に向き直り、

土「とりあえず、今回お前らに頼みたいのは、幕府のお偉方の護衛と、斬り込みだ。」

神「そんな危ないこと、ほまれにはさせられないネ！」

神楽は、ほまれに抱きついてそう言った。

梗「俺も賛成だ。

ほまれが助っ人に入ったところで、足手まといになるのは目に見えてる。」

ほ「…」

自分自身も分かってはいたことだったが、悔しいことに変わりはない。

そんなほまれを見て、土方は、

土「梗、ソイツ、剣術は出来るか？」

梗「分からねえ。

実を言うと、コイツと手合わせしたことは一度もねえんだ。」

神「ほまれ、どのぐらい強いアルか？」

ほ「はつきり言っちゃうと、分からない。  
今まで誰かと戦ったことって、ないから。」

一応、刀の持ち方とかぐらいは知ってるけど。」

土「ともかく、まだソイツの強さがどれくらいなのかは、どいつも分かってねエんだ。ここは、それをはっきりさせようじゃねエか。」

銀「何、誰かと手合わせさせようってか。」

土「俺が力量を計る。」

沖「とかなんとか言っつて、厭らしいことしよっつて魂胆ですかイ？」

土「違エよ！！俺が手合わせした方が、正確だろ。」

その後、取っ組み合いまで勃発したが、何とか話をついたようだ。

『ガヤガヤ』

隊1「副長と、あのほまれちゃんが手合わせするらしいぞ。」

隊2「マジで?!危ないんじゃないのか?!」

隊3「力量を見て、使えたら今度の任務に助っ人として入らせるつもりなんだとよ。」

神「いいアルか？」

こう、ねじ込むように打つネ！」

ほ「いや、ボクシングじゃないんだけど…（汗）」

新「邪魔になるよ！」

『ズルズル』

神「応援してるアル〜！」

ほ「ありがとう〜！」

梗「にしても、土方が相手とはな…！」

ほ「あの、こんなこと聞くのって失礼だとは思うんですけど、土方さんってどれくらい強い方なんですか？」

梗「少なくとも、一流じゃねーぞ。」

ほ「防具ナシってことは、寸止めですよね…！」

梗「俺が言えることは、白黒はつきりつけて戦えっつーことだ。」

山「これより、手合わせを始めます。防具は付着用、竹刀で相手の命を断てる寸前まで運んだ方が勝ちです。」

ほ「（白黒…）」

山「よーい、」

ほ「すいません！」

静まった場内に、声が響いた。

ほ「竹刀と“足”、使っていていいですか？」

場内がざわめき始める。

梗「（“足”？まさかアイツ…）」

山「どうします？副長。」

土「…いいだろう。」

ハンドテとして受けておく。竹刀と同じ扱いだ。」

山「よーい、始め！」

『ダンッ』

合図と共に踏み込んだ土方。

が…

『ヒュッ』

土「！」

なんと、もうそこにほまれはおらず、後ろに気配を感じた土方は、思い切り屈んだ。

『シュッ』

避けなければ負けるどころか、倒されていただろうというほどの、速い突きが空を切った。

予想外の展開に、皆啞然としていた。

竹刀や、刀での戦いにつきものの、武器同士の接触音がほとんどなく、場内には2人の移動音と風切り音が鳴っている。

ほまれは、梗の言いつけを守っていた。

“白黒はつきりした戦い”だ。

守りの時は、とにかく防御を固め、攻めの時は、相手に反撃の隙を  
与えるな、ということである。

手合わせが始まってから、早くも3分が経過した。

2分経ったあたりから、膠着状態なのだ。

どちらが先に仕掛けるのか。

見ているだけで息が詰まりそうになる間だった。

仕掛けたのは、ほまれ。

打ち込むと見せかけ、バック転で攻撃している。

『パァン』

ほまれの竹刀が弾かれた。

決まった。誰もがそう思った瞬間。

『バシィッ』

土方の手の甲に、ほまれの蹴りが入り、怯んだ。

山「そ、そこまで!」

ほまれが振り上げた右足は、土方の顔左側面スレスレで停止していた。

218

ほ「…竹刀と同じ扱いだって聞いたので。  
ありがとうございます。」

ぺこりとお辞儀をしたほまれ。

神「ほまれ、強いアル!」

新「すごいですね!」

ほ「良かった、倒されなくて…」

人が変わったようにへたり込むほまれ。

沖「手合わせ、どうでしたかい？」

土「どうもこうもあるか、力量を計ったただけだ。護衛に入れる。」

沖「雑魚ではないとは思ってやしたが、最後の1発…いや、2発は冷や汗モンだったでしょう？」

土「アイツ、手合わせが始まって顔つきがいきなり変わりやがった…」

沖「つまり、負けたって訳でさア。」

土「…悔しいが、そうなるな。それと、アイツはまだ全力を出してねエ。」

沖「手加減してるようには見えやせんでしたけどねエ。」

土「自分の力が全く理解出来ていない証拠だ。」

沖「ほまれの全力、見てみたいですねイ。」

真選組からの帰り道。

梗「意外にやるじゃねーか。」

ほ「梗さんの忠告のお陰で何とか…」

神「ほまれ、夜兔みただったネ。」

ほ「半分だけ人間じゃないからかな？」

新「半分人間じゃない?!」

銀「何だ、お前知らなかったの？」

新「一回も聞いたことありませんでしたよ!」

神「アタシもネ!」

ほ「生まれは地球だけど。」

神「マジでか。じゃあ、今度決闘」つこするアル!」

ほ「ふふっ、いいよ。

じゃあ、またね。」

梗「ほまれ、仕事は3日後らしいぞ。」

ほ「分かりました。」

梗「それと、俺たちも当日は、あの隊服着るらしい。お前はズボンかミニスカか、検討されてるんだと。」

ほ「スカート?! しかもミニスカですか?!」

梗「動きやすいのが一番だろ。ここはミニスカ…」

ほ「ナース服もそうでしたけど、“動きやすさ”をお題目に、変な格好させようとしてませんか?」

梗「ひでえ被害妄想だなオイ。ナース服の文句はあの天パに言え。」

銀「…」

新「…銀さん、何でティツシユ鼻に詰めてるんですか。」

銀「いや、誰かが俺のこと噂してるみたいなんだよ。」

新「普通は噂されると、鼻血じゃなくて、くしゃみが出るはずですよ！…！」

神「ナース服アル。」

新「ナース？…あ。／＼」

新八もティツシユを鼻に詰め始めた。

神「男は、どいつもこいつも同じアルな。」

ある晴れた日の昼下がりである。

羊は<sup>レイヨウ</sup>羚羊と化す。

いつも怒らない奴が怒るとマジヒル（後書き）

（後書き）

比較的、速いペースで話ができました。

彼の出番を多くしたのは、苦渋の決断の末のことです。要は、「負けちまえよ、ヘタレ」って感じですね。

ちなみに、“ヨウレイ 羚羊”というのは“カモシカ”のことです。

カモシカの正式な呼び名を見たら、「あ、“羊”って入ってる！やべえ、やべえよコレ！」という具合に興奮してしまいました。何だかんだ言って、この話を作る時にいい偶然がいくつも起こっている気がします。

あとは、完結までしっかりと持って行ければと思っています。

元旦スペシャル、元旦はヨーグルトドリンクだよー

(前書き)

このお話は、特に読んでおかないといけないところなどは、一つもありませんので、“やっぱ見んのやめっかな”という方は、即刻退場すれことをお勧めします。

言わば、番外編のようなものです。

元旦スペシャル〜元旦はヨーグルトドリンクだよ〜

…え、何故今回このような場で、

元旦スペシャル〜元旦はヨーグルトドリンクだよ〜

というイベントを設けたかと言いますと…

気分ですね。

しかも、私が不甲斐ないばかりに、アニメキャラの方々を誰一人として、出すことが出来ず、誠にすいません。

ここにあるものといえば、私の体と、ジャスタウェイ、宇宙怪獣ステファン、マーフィー君ぐらいですよ…

一応押し入れ（異界への出入り口）から引っ張り出してきたんですが、この状況…

人形劇でもやればいいんですかね。

え？ “元旦スペシャル” なんだから、もっと過激なことやれ？

… 過激なことなんて、出来ませんよ…

せいぜい、リア充の奴ら全員爆発させる妄想ぐらいですからねえ…

ある国と条約を結ぶために、土喰おうとしたり、メカで存在証明したりするようなHさんのようにはできませんし、ましてや、お上の首を狙ったり、国の中心部を火の海にしようとしたりするTさんや、そんな物騒なことは出来ませんよ。

にしても、寂しいですね… いつも、誰かと一緒にイベントなんて、ほとんどないはずなのに、すごく寂しい気が…

あれ？… 目から鼻水が…

「うわっ、汚え顔。」

あっ、君達は！… トと エリー？

ほ「違いますよ！

作者さんが、“元旦に何かこう…パツとやりたいよね、パツ！”って言って、私達呼んだんじゃないですか。」

梗「作者お前、どんだけレベル低いんだよ。

他の奴らは軽々クリアしてる、アニメキャラへのアポ取れないって、かなりひでーぞ。」

ほ「RPGで言うところの、“雑魚モンスターにも先制攻撃で倒されて、経験値が中々上がらない勇者”タイプなんじゃないですか？」

ビシバシ叩くね、君達。

いやね、アポなんて簡単だと思ってさ、普通にアポ状出したら、ご丁寧に受取人のキャラの方が破いたらしくて、昨日郵便局の人が来たから、玄関に出たら、目の前でビリビリに破かれた手紙下に落とすしてバイクで去って行ったよ…

ほ「…受け取った人って…」

梗「名前のイニシャルに“S”とか入ってるんじゃないか？」

君さ、ひよっとして2つのアニメキャラあてに送ったアポ状の受取人知ってるの？

梗「さあな。少なくとも、普段から鬼畜でサディスティックな奴だ  
つてことしか言えねえな。」

…あー…そういう…

ほ「…とりあえず、それは忘れて、元旦スペシャルらしくやりまし  
ようよ。」

そっか、そうだよね…

あの2人のトコに殴りこもったって、生きていられる確率は限り  
なくゼロに近いしね…

ほ「ということ、元旦です。」

梗「オリキャラしか出てねーのかよカス」とか思った奴は、即刻  
…っーかもつ見るのとっくにやめてるか。」

ほ「何だかんだ言って、一番見てもらってんのってコレだし」と  
いう、作者さんの一言により、この、「狼と羊」で“元旦スペシャ

ル”というイベントを設けました。」

…あれ、次は…

ほ「（小声）…次、作者さんですよ。何で今になって台本めくってるんですか。」

あつたあつた。

えーと、k…

梗「まず、解剖するにあたって、からだの作りを理解s「ストオーツプ！」元旦スペシャルだろ？

何かしら、面白いことタメになること紹介しねーと、やっていけねーぞ？。」

ほ「何で梗さんは、話題がないと解剖について語りたがるんですか！もっと明るい話題にしましょうよ！」

梗「最初の肉が裂けるあの感触…そして中を見れば、そいつがどんな奴か大体分かる…それがたまたまらねえんだよなあ…」

ほ「……………」

何かニタニタ笑ってるんですけど…しかも、あの“手”何。もうメ  
スと身体が一心同体的感じですか。

しかも、ほまれは引いてるし…

梗「…あー、お前らが騒ぎ立てっから、したくなっちまっただろー  
が。」

ほ「ま、まさか…ねえ？」

だよね、そんな訳ないよ。

梗「オイ、その駄作者。ちょっと来い。」

アレ、やっぱり予感的中？てか離せ狂人がアアア！！マジムリだか  
ら！

解剖したって面白くも何ともないからアア！

ほ「作者さん解剖したら、「狼と羊」終わりですよ！だから離しま  
しょうって…！」

ほまれ、私は気にしないでいいから、警察を呼びに行かないと。

ほ「でも!…」

頼んだよ。出来れば、ストーカーだったり、ニコチンマヨ野郎だったり、ドSだったりする警察の人はやめてね。

ほ「…分かりました!」

ハア、何とか…

梗「ドコからにすっかなあ…」

うわゝ、何ヶ所も切られるのか…

私が今、君達に伝えたいのは、これだ!

元旦にはヨーグルトドリンクだよ！

梗「何だ、このCM。」

ほ「最近は変わったのが多いですからね。」

『プチン』

元旦スペシャル、元旦はヨーグルトドリンクだよー」（後書き）

（後書き）

ようやく、一番最初の プロフィール であった、梗の「狂ってるカモ。」の部分を出すことが出来ました。

：ハイ、ちょっと元旦でことで、はしゃいでました。謝ります。  
でも、ヨーグルトドリンクは必要不可欠ですよ。そう、ヨーグルト  
ドリンクさえ飲んでおけば全ては上手くいくんです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9821x/>

---

狼と羊

2012年1月1日01時47分発行